

文部科学省委託事業

「高等学校教育改革の推進に関する調査研究事業」

総合学科の在り方に関する調査研究

報告書

平成 24 年 3 月 30 日

調査研究機関：東京女子体育大学

研究代表者：服部 次郎

はじめに

総合学科は、普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科であり、高等学校教育の個性化・多様化を推進するため、普通科、専門学科に並ぶ新たな学科として平成6年度より設置された。設置から18年を経た今年度には、全国に350校余りの総合学科が開設されている。

平成23年1月、中央教育審議会は、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」を答申した。近年、「若者の社会的・職業的自立」や「学校から社会・職業への移行」を巡る様々な課題が生じており、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」、すなわちキャリア教育の推進が喫緊の教育課題であるとしている。この中で、総合学科については次のように課題を指摘している。

「導入以降、設置数は年々増加しており、教育と職業との接続、生徒の学校から社会及び高等教育機関への円滑な移行について一定の成果を上げている学校が見られる一方、総合学科全体として見た場合、導入当時に期待されていた教育の特色をいかし、その役割を果たすことができているかどうかを含め、現時点での成果と課題の検証が必要であることが指摘されている。」（答申第3章44頁19-23行）

これを受けて、文部科学省は、平成23年6月、「高等学校教育改革の推進に関する調査研究事業」として研究課題「総合学科の在り方に関する調査研究」を公募した。総合学科の現時点での成果と課題の検証と今後の在り方に関する調査研究を行い、その成果を我が国における今後の高等学校教育の充実に向けた政策の企画立案に資することとしている。

本研究会は、この事業に応募し、委託を受けた。研究員の多くは、18年前の総合学科創設に学校現場で立ち会った教員である。研究は中立でなければならないことは知っているが、私たちは総合学科への期待を込めた熱い心情を抱いていることは隠さない。18年を経ても、総合学科への世上の評価が定まらないことへの戸惑いを抱いていることも隠さない。中教審答申にもあるように総合学科の課題を指摘することは容易い。だからこそ、私たちは、この調査研究を通して総合学科の豊かな成果と未来への可能性について明らかにしたい。総合学科が今後の高等学校教育の充実を資するものであることを明らかにしたい。今日の総合学科の学校現場で奮闘している高校教員を勇気づけられる提言をしたいと考えた。

本報告書は、18年を経た総合学科の豊かな成果を明らかにし、と同時に乗り越えるべき課題を考察し、今後の高校教育の充実に貢献できる総合学科の可能性について提言しようとするものである。総合学科のますますの発展を願ってやまない。

平成24年3月30日

東京女子体育大学

高等学校総合学科検証調査研究会

研究代表者：服部 次郎

総合学科検証調査研究会・研究員名簿

研究代表者	服部 次郎	東京女子体育大学教授・前筑波大学附属坂戸高等学校長 (道德教育・倫理学)
共同研究者	青木 猛正	埼玉県立特別支援学校埴保己一学園教頭 (数学科・特別支援教育)
	奥村 準子	筑波大学附属坂戸高等学校教諭 (国語科)
	小澤 真尚	筑波大学附属坂戸高等学校教諭 (数学科)
	小田 清隆	愛媛大学農学部准教授 (都市農村交流論)
	工藤 泰三	筑波大学附属坂戸高等学校教諭 (英語科・国際教育)
	久保田一志	栃木県立栃木高等学校教諭 (英語科)
	小市 聡	横浜市立みなと総合高等学校副校長 (商業科・ビジネス教育)
	小清水貴子	静岡大学教育学部准教授 (家庭科教育)
	今野 良祐	筑波大学附属坂戸高等学校教諭 (地理歴史科)
	竹内 義晴	筑波大学附属坂戸高等学校教諭 (公民科・福祉科)
	建元 喜寿	筑波大学附属坂戸高等学校教諭 (農業科・国際協力)
	田畑 邦仁	長野県丸子修学館高等学校教諭 (農業科)
	深澤 孝之	筑波大学附属坂戸高等学校教諭 (工業科・情報科)

以上 14 名

目 次

第1章 調査研究の目的	1
1-1 総合学科高等学校の特色と役割	1
1-2 中教審答申における総合学科への課題の指摘	4
1-3 本調査研究の課題設定	5
1-4 本調査研究の実施体制と方法	7
1-5 本調査研究の実施経過	9
第2章 総合学科に在籍する生徒の意識調査	11
2-1 研究の目的と調査の方法	11
2-2 調査結果の分析と考察	14
(1) 高等学校の選択について	14
(2) 「産業社会と人間」における学びについて	15
(3) 科目選択について	17
(4) 将来の進路や生き方に対する展望	20
(5) 総合学科に進学したことに対する自己評価	29
(6) 高校生活に対する意識	33
(7) 総合学科の改善点に対する意識	37
2-3 満足度の高い学校への訪問調査	42
(1) 訪問校の選定にあたって	42
(2) 長野県塩尻志学館高等学校の取り組み	46
(3) 愛媛県立川之石高等学校の取り組み	49
2-4 生徒の意識調査からみた総合学科の現状と課題	52
(1) 総合学科への入学にあたって	52
(2) 産業社会と人間および科目選択について	55
(3) 系列と科目選択	57
(4) 大学進学と科目選択	57
(5) 総合学科の教員として	58
(6) 総合学科とそこで学ぶ生徒の姿	58
<参考資料> T高校 1年次生Mさんが書いた「ライフプラン」	59
<参考資料> 生徒調査用紙	60
第3章 生徒の主体的な学びを促すための指導上の工夫の調査	64
3-1 総合学科における主体的な学びの工夫	64
(1) キャリア教育と主体的な科目選択に基づいた学習の相互作用	64
(2) 主体的な学びを喚起するはたらきかけ	68
(3) 職業や社会とのかかわりを重視した自己の生き方・在り方学習の推進	70
(4) 主体的な学びの典型である探求活動（課題研究）の推進	70

3-2	「産業社会と人間」の調査結果の分析と考察	72
(1)	「産業社会と人間」における代表的な学習活動	72
(2)	「産業社会と人間」に関する独自のテキスト（ノート）作成	74
(3)	継続的なキャリア教育展開に向けて（接続・連携の課題）	75
(4)	「産業社会と人間」調査のまとめ	76
3-3	特色ある「産業社会と人間」指導事例の紹介	77
(1)	「30歳のレポート」の取り組み（大分県立日田三隈高等学校の実践）	77
	＜参考資料＞「30歳のレポート」の事例紹介	83
(2)	「進路意識の涵養」を目指すキャリア教育	85
	（兵庫県立伊丹北高等学校の実践）	
	＜参考資料＞「産業社会と人間」年間指導計画事例集（文部科学省 HP）	
3-4	「産業社会と人間」の学びと高等教育、初等及び前期中等教育との関係性	93
(1)	学士力と「産業社会と人間」の学び	93
(2)	社会人基礎力と「産業社会と人間」の学び	95
(3)	「産業社会と人間」と「学士力」、「社会人基礎力」	97
(4)	初等及び前期中等教育のキャリア教育と「産業社会と人間」の関係性	99
(5)	本節のまとめにかえて～若者に未来を与える提言～	100
	＜参考資料＞「産業社会と人間」調査用紙	103
第4章 総合学科の校長への質問紙調査による総合学科の現状と課題		
4-1	総合学科開設校概観	105
(1)	総合学科高等学校の体制	105
(2)	産業社会と人間の指導体制	107
(3)	教育課程の特色	109
(4)	系列の位置づけと科目選択	110
(5)	学校外における学修の単位認定	111
(6)	学校設定教科・科目	112
(7)	入学者選抜	113
	＜参考資料＞学校設定教科・科目一覧	114
	＜参考資料＞入学者選抜の工夫	128
4-2	教員配置・教職員研修について	131
(1)	教員配置の状況	131
(2)	予算上の措置	136
(3)	研修の充実	136
4-3	学校外の人材の活用について	141
(1)	学校外の人材の活用状況	141
(2)	学校外の人材の活用による効果	143
(3)	学校外の人材を活用する上での問題点	143
(4)	問題の改善および今後の展開	143
4-4	中学校等に対する情報発信について	145

(1) 各校における情報発信の取り組み状況	145
(2) 情報発信の成果と課題	146
(3) 問題の改善及び今後の展開	147
<参考資料>総合学科校長への調査用紙	150
第5章 都道府県教育委員会への質問紙調査による総合学科の評価と展望	159
5-1 調査結果の分析と考察	159
(1) 総合学科高等学校を設置する意義	159
(2) これまで総合学科高等学校がもたらした成果	160
(3) 総合学科高等学校が現在抱えている課題	161
(4) 課題の解決策として行っていること、あるいは行うことを検討していること	162
(5) 総合学科高等学校に対しての重点的な措置	165
(6) 現在の総合学科高等学校設置の進捗状況	166
(7) 今後の総合学科高等学校設置予定と設置形態について	167
(8) 今後の総合学科高等学校の設置の考え	167
(9) 特色ある総合学校高等学校	168
(10) 総合学科に関して、文部科学省に対する要望	168
<参考資料>特色ある総合学科高等学校	169
5-2 設置者の評価と今後の構想	176
(1) 総合学科設置の意義 — 地域のキャリアセンターとしての存在	176
(2) 総合学科の成果 — 教員間の同僚性	176
(3) 総合学科が抱える課題 — 教員養成	177
(4) 総合学科が抱える課題 — 進路	178
(5) 総合学科が抱える課題 — 地域・保護者への理解推進	178
(6) 総合学科設置に関する今後の見通し — 普通科から総合学科へ	179
<参考資料>教育委員会への調査用紙	180
第6章 卒業生インタビュー調査による「総合学科が育成する人物像」	184
6-1 卒業生インタビュー調査の分析と考察	184
(1) 調査の目的と方法	184
(2) 調査結果と分析	185
6-2 総合学科が育成する人物像	198
(1) 人間関係・社会形成能力	198
(2) 自己理解・自己管理能力	199
(3) 課題対応能力	199
(4) キャリアプランニング能力	200
(5) 高校教員となった総合学科の卒業生	200
(6) 卒業生インタビュー調査のまとめ	201
第7章 調査研究のまとめ	202

7-1	研究課題別のまとめ	202
(1)	研究課題1 多様な生徒の実態把握及び生徒の意識調査を行う	202
(2)	研究課題2 生徒の主体的な学びを促すための指導上の工夫を調査する。 併せて、科目「産業社会と人間」についての事例の収集（データベース化）を行う	203
(3)	研究課題3 多様な科目を設定する総合学科における教員配置、教職員研修の効果的な方法について調査する	204
(4)	研究課題4 学校外の人材の積極的な活用について調査する	205
(5)	研究課題5 中学校等に対する効果的な情報発信について調査する	205
(6)	研究課題6 都道府県教育委員会に質問紙調査を行い、設置者の総合学科に対するこれまでの評価と今後の構想を調査する	206
(7)	研究課題7 卒業生インタビューにより「総合学科が育成する人物像」を調査する	206
7-2	今後の総合学科の在り方に関する本調査研究よりの提言	206
(1)	総合学科の理念は今も正しい	206
(2)	「産業社会と人間」は、すべての高等学校で実施すべきである	207
(3)	「総合学科はキャリア教育の拠点校」として1通学区に1校を設置する	207
(4)	普通科を総合学科に改編する	207
(5)	高校教員の多忙感を減じるための対策を立てる	208
(6)	教員養成の改革（大学の教職科目に「キャリア教育」を必修化する）	208
(7)	文部科学省の総合学科推進の施策が待たれる	209

第1章 調査研究の目的

1-1 総合学科高等学校の特色と役割

平成23年1月、中央教育審議会は、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」を答申した。この中で、総合学科については次のように課題を指摘している。

「導入以降、設置数は年々増加しており、教育と職業との接続、生徒の学校から社会及び高等教育機関への円滑な移行について一定の成果を上げている学校が見られる一方、総合学科全体として見た場合、導入当時に期待されていた教育の特色をいかし、その役割を果たすことができているかどうかを含め、現時点での成果と課題の検証が必要であることが指摘されている。」(答申第3章44頁19-23行)

本調査研究は、これに端を発して、総合学科の現時点での成果と課題を検証し、その上で今後の総合学科の在り方について提言することを目的とするのであるが、上の指摘にもあるところの「導入当時に期待されていた総合学科教育の特色」とはなにか、また、「導入当時に期待された総合学科の役割」とはなにかを明らかにするところから始めなければならない。

初めに高校教育改革の柱として総合学科が登場してくる流れを整理しておく。

①臨時教育審議会による教育改革の提唱

臨教審の最終答申「教育改革に関する第四次答申」は、1987年8月7日に出され、教育改革の必要性、教育改革の視点、改革のための具体的方策などについて述べて、その後に始まる教育改革の口火を切った。これまでの学校教育の弊害である「画一性・硬直性・閉鎖性」を打破して「個性重視の原則」を確立するという教育改革の方向性を示したこと、後期中等教育の構造を柔軟にして多様な教育の機会を提供するために制度の再編を検討する必要があるとしたこと、このことが次の第14期中教審の「総合的な新学科」の提案に引き継がれていく。

②第14期中央教育審議会答申における「総合的な新学科」の提案

第14期中央教育審議会は、1991年4月19日に、「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」と題する答申を出した。その内容は、「後期中等教育の改革とこれに関連する高等教育の課題」及び「生涯学習の基盤整備」である。特に、教育内容の画一性や受験競争の過熱化など、今日の学校教育の問題点は高校教育において深刻であるとして、高校教育改革が急務であると説いた。今日の高等学校は、普通科と専門学科に分かれているが、普通科については、大学進学を前提とした教育課程を編成していて、就職者に対する職業教育は不十分であり、専門学科は進学希望者が増加しているにもかかわらず、過度に専門分化した職業教育で、進学指導は不十分である。また、今日の産業・就業構造が大きく変化している時代では、従来の特定の職業のための職業教育では不十分で、あらゆる職業に共通の実践的な知識・技術を習得させることが求められているとして、次のように「総合的な新学科」を提案して学科制度の再編成を求めている。

「このような現状を踏まえ、現在の普通科と職業学科に大別されている学科区分を見直し、普通科と職業学科とを総合するような新たな学科を設置することが適切と考えられる。

この新たな学科は、今後、高等学校の整備・再編を進めるに当たって、職業学科を転換したり、普通科における職業教育の充実をより一層推し進める形で設置していくことが適当であろう。」（第Ⅱ部第1章第1節(1)）

③「高等学校教育の改革の推進について（第四次報告）－総合学科について（報告）－」における総合学科の実施要項の提示

第14期中教審答申を受けて、1991年6月に、文部省は「高等学校教育の改革の推進に関する会議」を設置して、高校教育改革の具体的な施策の検討を始めた。この推進会議は、総合学科、全日制単位制高等学校、学校間連携、高校入試改善などについて、第一次から第四次にわたる報告書をまとめて公表したが、1993年2月12日に発表した「高等学校教育の改革の推進について（第四次報告）－総合学科について（報告）－」（以下「第四次報告」と記す）が、総合学科の基本理念と学科の枠組みを規定したものとして、学校現場における総合学科創設の拠り所となった。

すなわち、本節の課題である「導入当時に期待されていた総合学科教育の特色」と「導入当時に期待された総合学科の役割」とは、この「第四次報告」を読み解くことによって明らかになる。

第一は、「導入当時に期待されていた総合学科教育の特色」であるが、「第四次報告」では「三－（一）総合学科における教育の特色」で次の二つをあげている。

1 将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること。

今日の豊かな社会の中で、多くの事柄について選択の幅が広がってきているが、このことは一面において、青少年が将来の生き方を考え決定していくことが先送りされる傾向にある。しかし、このことを消極的にのみとらえるのではなく、自己の在り方生き方をより深く考えていくという積極的な契機としてとらえていく必要がある。

このため、在学中に自己の進路への自覚を深めることが重要であることから、その動機付けとなるような科目を開設するとともに、生徒の科目選択に対する助言や就職希望者・進学希望者の双方を視野に入れた進路指導などのガイダンス機能を充実する必要がある。

2 生徒の個性を生かした主体的な学習を通して、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を可能にすること。

生徒の能力・適性、興味・関心等に応じた学習を進めることにより、学ぶことの楽しさや成就感を得させながら学習に対する意欲の形成を図っていくことが重要である。

このため、教育課程の編成に当たっては幅広く選択科目を開設し、生徒の個性を生かした主体的な選択や実践的・体験的な学習を重視し、多様な能力・適性等に対応した柔軟な教育を行うことを可能にする必要がある。

総合学科では、「将来の進路について明白な展望を持たずに入学して来る生徒」を否定的には見ないで、「高等学校における様々な学習や活動を通して自己の能力や適性を見いだしていこうとする積極的な契機」として捉える。そのために、自己の進路への自覚を深めさせる学習の中心となる「産業社会と人間」の開設や、科目選択や就職・進学の相談に対応する「ガイダンス機能の充実」が必要になる。

また、学ぶことの楽しさや成就感を体験させるためには、学校が一律に指定する「画一的・硬直的・閉鎖的な教育課程」ではなく、「生徒の個性を生かした主体的な選択が可能となる教育課程」を実現する必要がある。

すなわち、「導入当時に期待されていた総合学科教育の特色」は、「個性尊重と進路指導重視の高校」であるが、どのような高校生を対象としていたかといえば、明確な大学進学希望を持って普通科に進学する生徒や特定の分野の専門教育を受けることを明確に希望して専門学科に進学する生徒ではなく、将来の進路について明確な展望を持たずにいる生徒をも受け容れて、「高等学校での様々な学習や活動を通して自己の能力や適性を発見していく教育」を行うところに特色がある。多くの総合学科が「自分探しの高校」というキャッチコピーを使ったところでもあり、今日的な言葉では「キャリア教育重視の高校」というところである。

次に、「導入当時に期待された総合学科の役割」であるが、「第四次報告」では「三ー(三)総合学科を設置する意義」で次のように述べている。

- 1 第一に、既存の学科の枠にとらわれず、所要の条件整備と相まって、先に提言された「全日制課程における学年の区分によらない教育課程の編成・実施」、「学校間連携」、「専修学校における学習成果の単位認定」及び「技能審査の成果の単位認定」を含めた諸制度を大胆に活用するなど、思い切った教育課程の弾力化を容易にすることが期待できることである。
- 2 第二に、推薦入学をはじめとする多様な選抜方法の工夫や多様な教科・科目の開設に伴い可能となる履修科目の自由な選択を通して、能力・適性等の多面的な角度からの評価が行われることにより、学力を単なる知識の量としてとらえることから生じる、いわゆる偏差値を尺度とする高等学校間の序列意識を打破する契機となることが期待できることである。
- 3 第三に、総合学科においては、様々な分野の基礎・基本を学習するのに適切な科目が多数開設されるため、地域の人々の要望を踏まえつつ生涯学習機関としての役割を果たすことが期待できることである。

すなわち、「導入当時に期待された総合学科の役割」は、

- ①思い切った教育課程の弾力化の先行事例となる
 - ②偏差値による序列意識を打破する契機となる
 - ③地域の人々の生涯学習機関としての役割を果たす
- という三点といえる。

本調査研究は、中教審答申がいうところの「総合学科全体として見た場合、導入当時に期待されていた教育の特色をいかし、その役割を果たすことができているかどうかを含め、現時点での成果と課題の検証が必要であることが指摘されている。」を受けて、現状の総合学科が、「総合学科教育の特色」を生かし、「総合学科の役割」を果たしているかを明らかにすることが課題となる。

1-2 中教審答申における総合学科への課題の指摘

先述したように、本調査研究の動機には、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（平成23年1月）において、以下のような総合学科の課題を指摘されたところにある。（答申第3章59頁②総合学科の課題）

- ①生徒が目的意識や将来の進路への自覚を持っていないため、主体的な科目選択を行わせることが難しい（安易な科目選択を行う傾向にある）。
- ②中学生及びその保護者の総合学科に対する理解や認知度が低い。
- ③中学校の教職員の総合学科に対する理解が不十分である。
- ④高等学校の教職員の総合学科に対する理解が不十分である。
- ⑤様々な教科・科目を開設しているため、他の学科と比べて教職員の負担が大きい。
- ⑥教員数が十分でないため、多様な教科・科目を開設することが難しい。

また、同答申は「産業社会と人間」について以下のように述べている（答申第3章51頁）。

- ①「産業社会と人間」で実施している教育活動としては、社会人・職業人や卒業生、地域の人々による講話や懇談、各教科・科目の履修計画の作成、職業に関する知識等の修得、ライフプランの作成・発表等があり、啓発的な経験を通して、進路の研究や自己の適性の理解、将来設計の具体化等を図っていることがうかがえる。
- ②これらの教育活動を実施したことによる成果としては、「自己の将来の生き方・働き方や進路について考察することができている」（学校：約98%、教育委員会：100%）、「自己の能力・適性、興味・関心を知ることができている」（学校：約94%、教育委員会：約97%）、「『学ぶこと』『働くこと』への意欲や積極的な態度を育成することができている」（学校：約85%、教育委員会：約92%）、ことが当てはまると回答した学校・教育委員会が多く、生涯にわたる多様なキャリア形成に共通して必要な能力や態度の育成等を目指した活動が、行われていることがうかがえる。
- ③一方、「産業社会と人間」で実施している教育活動として、約85%の学校が「職業に関する知識等の修得」を挙げている。他方、「産業社会と人間」の活動と各教科・科目等の活動の関連を尋ねたところ、例えば、公民科（約7.8%）、家庭科（約4.6%）と関連させている学校はわずかであり、約12%の学校が「いずれの教科・科目等にも関連付けていない」と回答している。キャリアを積み上げていく上で必要な知識等は、教科・科目等を通じて修得し、それを「産業社会と人間」などの時間を活用して、自らのキャリア形成に関連させて理解することが重要であるが、「産業社会と人間」を実施している学校でも十分な取組ができていないといった課題もうかがえる。
- ④また、「産業社会と人間」の指導体制について、約47%の学校が「校内に『産業社会と人間』に関する委員会等の研究・推進組織を設けている」と回答し、約30%の学校は「ホームルーム担任が中心となって指導計画を作成し、授業を行っている」と回答している。他方、「産業社会と人間」を実施する上での課題として、「専任の教員が明確になっていないため、学校として組織的・計画的な指導を行うことが難しい」（学校：約33%、教育委員会：約52%）、また、「産業社会と人間」の改善・充実を図るための方策として、「各学校において、校内に『産業社会と人間』に関する委員会等の研究・推進組織を設けた方が良いと考える」（学校：約51%、教育委員会：約60%）、「各学校において『産業社会と人間』の専任教員を設けた方が良いと考える」（学校：約41%、教育委員会：約30%）と回答した学校・教育委員会が多い。このように、ホームルーム担任が個々に担当するのではなく、学校全体の体系的な取組として実施するための担当組織の整備や教員の配置も課

題であると考えられる。

⑤「産業社会と人間」については、実施することの意義を認めている学校・教育委員会がほとんどを占めている。今後、「産業社会と人間」において指導される成果・課題を踏まえて、その充実に向けた取組が進むことが期待され、また、高等学校の教育課程に、「産業社会と人間」又はそれに類する教科・科目等のような中核となる時間を明確に位置付けることについて、更に検討が必要である。

これらの総合学科や「産業社会と人間」について、中教審答申が指摘した課題についても検討を加えていくことが本調査研究の目的である。

1－3 本調査研究の課題設定

本調査研究は、以下のように研究課題を設定する。

研究課題1 多様な生徒の実態把握及び生徒の意識調査を行う

現在、全国に約350校の総合学科高等学校が開設され、これらは「全国高等学校総合学科校長協会」に組織されている。この組織を活用して、地域別・設置年度別・タイプ別等の調査対象校を選定し、3年次在籍生徒を対象とした質問紙調査を行う。校数にして32校、生徒数にして約4000名を予定している。個性尊重・キャリア教育重視の理念の下に開設された総合学科に対して現在在籍する生徒はどのように感じているかを明らかにする。中教審答申が指摘する課題の根拠データは学校と教育委員会への調査であるので、本研究会が行う総合学科に在籍する生徒を対象とした調査は別の視点から総合学科の現状と課題を明らかにすると思われる。

主要な質問項目は以下のようなものである。

- ①総合学科の特色をどう捉えているか。（普通科・専門学科との違いを理解しているか）
- ②個性尊重の教育を受けているか。
- ③「産業社会と人間」の意義をどう捉えているか。
- ④科目選択に満足しているか。（学校の制度として・自分の意識の確立は）
- ⑤科目選択や進路選択におけるガイダンス機能は充実しているか。
- ⑥将来の進路や生き方在り方に展望を持てたか。
- ⑦総合学科に進学したことをどう自己評価しているか。

研究課題2 生徒の主体的な学びを促すための指導上の工夫を調査する。併せて、科目「産業社会と人間」についての事例の収集（データベース化）を行う

上の全国組織を活用して、科目「産業社会と人間」の各校責任者から質問紙調査を行う。同時に各校の「産業社会と人間」年間指導計画表を提出してもらい、内容を分析して、優れた指導事例を選定する。選定された対象校を訪問して、「産業社会と人間」責任者に、指導上の工夫や留意点をインタビュー調査する。対象校の指導事例は、本研究会によって解説を加えて整理し、文部科学省によってデータベース化される。

主要な質問項目は以下のようなものである。

- ①生徒の主体的な学びを促すための指導上の工夫はなにか。生徒に目的意識や将来の進路への自覚を持たせるための指導上の工夫はなにか。

- ②「産業社会と人間」の年間指導計画において、我が校の特色（重点指導項目）はなにか。
- ③「産業社会と人間」の活動と各教科・科目等の活動の関連をどのように考えるか。
- ④学校全体の体系的な取組として実施するための担当組織の整備や教員の配置をどう考えるか。

研究課題3 多様な科目を設定する総合学科における教員配置、教職員研修の効果的な方法について調査する

上の全国組織に加盟する校長に質問紙調査を行い、総合学科の教員配置が適正であるか、教職員研修が効果的に行われているかを分析し考察する。その上で、教員配置、教職員研修について、今後の在り方を提案する。

主要な質問項目は以下のものである。

- ①多様な選択科目を開設する総合学科として必要な教職員の配置がなされているか。
- ②教職員配置の現状は、どのような問題を生じさせているか。
- ③総合学科を理解するための教職員研修はどのように行われているか。
- ④教職員に総合学科への理解は十分にされているか。
- ⑤校長として、総合学科の現状をどのように捉えているか。

研究課題4 学校外の人材の積極的な活用について調査する

3の校長アンケートと同時に、学校外の人材の活用について質問紙調査を行う。優れた活用事例があれば、対象校を訪問して、担当者にインタビュー調査を行い、実施上の課題と留意点を整理し、成功事例として紹介する。

主要な質問項目は以下のものである。

- ①学校外の人材をどのような場面で活用しているか。
- ②学校外の人材を活用するのにどのような工夫をしているか。

研究課題5 中学校等に対する効果的な情報発信について調査する

3の校長アンケートと同時に、中学校等への効果的な情報発信について質問紙調査を行う。優れた発信事例があれば、対象校を訪問して、担当者にインタビュー調査を行い、実施上の課題と留意点を整理し、成功事例として紹介する。

主要な質問項目は以下のものである。

- ①中学生及びその保護者は、総合学科を十分に理解し認知しているか。
- ②中学生及びその保護者に対して、どのような情報発信の工夫をしているか。
- ③中学校の教職員は、総合学科を十分に理解しているか。
- ④中学校の教職員に対して、どのような情報発信の工夫をしているか。

研究課題6 都道府県教育委員会に質問紙調査を行い、設置者の総合学科に対するこれまでの評価と今後の構想を調査する。

主要な質問項目は以下のものである。

- ①貴都道府県内の総合学科の設置状況は順調であるかどうか。
- ②高校教育改革における総合学科の意義をどのように理解しているか。
- ③総合学科は、貴都道府県の高校教育の発展に貢献しているか。
- ④これまでの貴都道府県内の総合学科の成果をどう評価しているか。

- ⑤総合学科の課題はどこにあるか。
- ⑥貴都道府県では、今後の総合学科開設をどのように考えているか。

研究課題7 卒業生インタビューにより「総合学科が育成する人物像」を調査する。

研究員の所属または以前所属した総合学科（筑波大学附属坂戸高等学校・愛媛大学附属高等学校・長野県塩尻志学館高等学校・栃木県立足利南高等学校・横浜市立みなと総合高等学校）において、個性を伸ばし能力を開花させた卒業生を選定してインタビュー調査し、総合学科が育成する人物像を明らかにする。

主要な質問項目は以下のようである。

- ①今、どのような職業で、どのような仕事しているか。
- ②今の仕事は、総合学科で学んだことと関わりがあるか。
- ③総合学科で学んだことは、自分の人格形成にどのような影響があったか。
- ④卒業して進学したり就職したりした後に、普通科や専門学科を卒業した人との違いを意識したりしたことはあったか。

1-4 本調査研究の実施体制と方法

本調査研究に当たって委託事業団体である東京女子体育大学内に「高等学校総合学科検証調査研究会」を組織した。研究員は、研究代表者である同大学教授・服部次郎以下計14名である。「図1：事業の実施体制図」に示すとおり、研究員を以下の班に編成した。

A班：総合学科生徒への意識調査（小清水・深澤・建元・小澤）

B班：「産業社会と人間」事例調査（小田・奥村・田畑・今野）

C班：総合学科高校長への質問紙調査（青木・竹内・久保田・工藤・小市）

卒業生インタビュー調査特別班（奥村・小田・田畑・久保田・小市・今野）

A～C班は、以下のように質問紙調査を行って、基礎データを作成した。

A班：「総合学科の学びに関するアンケート調査」

- ・本文2-1で述べるところの理由によって選定した32校に対して、事前に電話で依頼し、調査への協力承諾を得た後に質問紙を送付した。31校が集計期限までに回答した。有効回答数は、3703である。

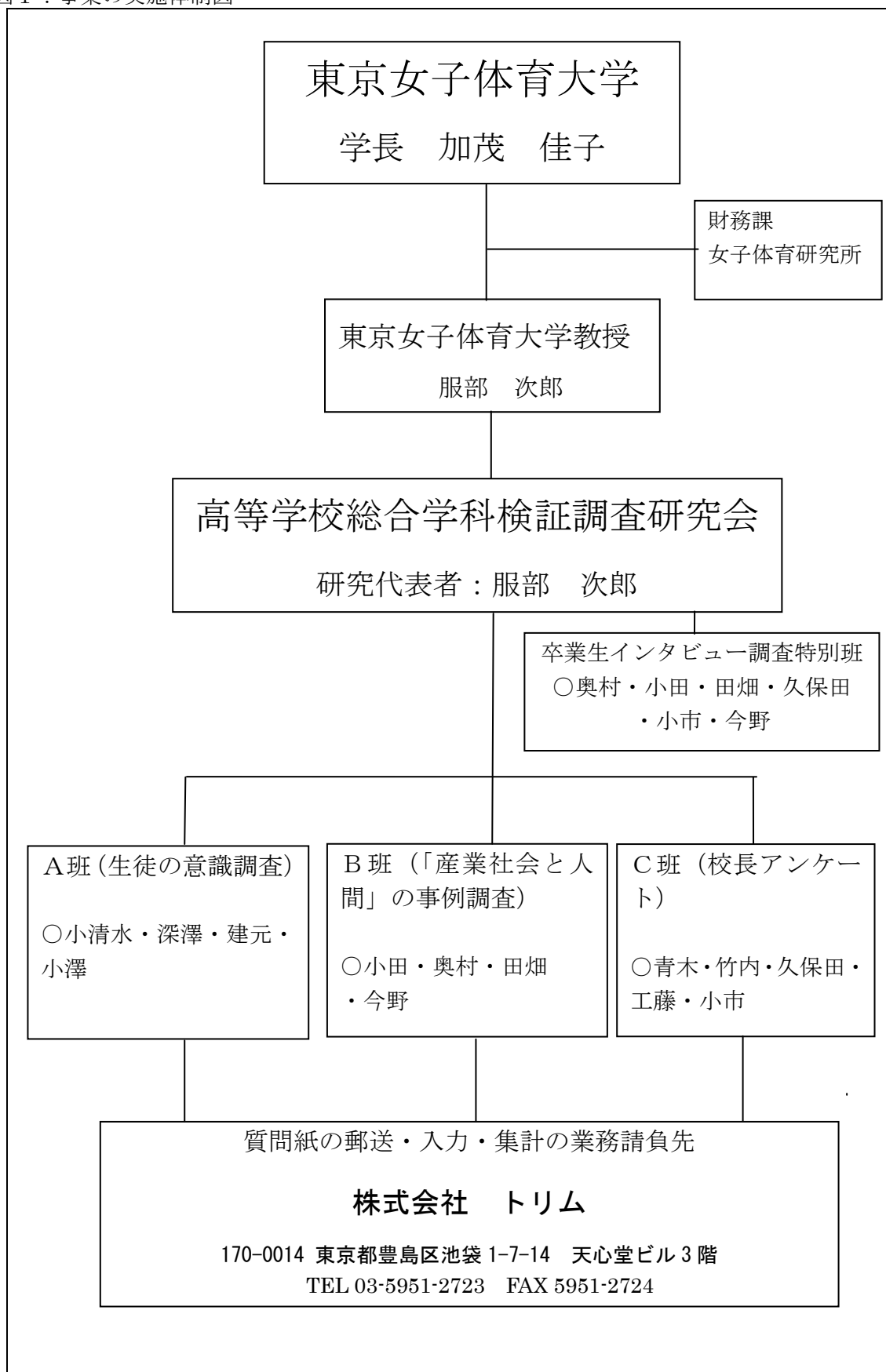
B班：「「産業社会と人間」に関する調査」

- ・「全国総合学科高等学校長協会」にご協力をお願いした上で、加盟校322校へ質問紙調査票を送付した。各校の「産業社会と人間」担当者のご回答をお願いした。206校が回答した。（回収率64.0%）

C班：「総合学科に関する調査」

- ・B班の調査用紙と同封で校長協会加盟校322校に送付した。校長あるいは校長の代理の方に回答していただけるように依頼した。209校が回答した。（回収率64.9%）

図 1 : 事業の実施体制図



C班：「総合学科の在り方に関する調査」

- ・47の都道府県教育委員会と総合学科を設置している5の政令指定都市教育委員会と市立総合学科を設置している6市教育委員会の計58の教育委員会の総合学科担当者宛に事前承諾なしに調査用紙を郵送した。44の教育委員会から返信があった。(回収率75.9%)

卒業生インタビュー調査班

担当者の勤務した総合学科の卒業生から選定して、個別に面談して調査した。

尚、質問紙調査の印刷・発送・回収・入力・集計の作業は、業務請負先の(株)トリムに発注した。

1-5 本調査研究の実施経過

平成23年 7月 1日	企画書提出
平成23年 7月 15日	審査会(プレゼンテーション)
平成23年 8月 19日	委託契約締結
平成23年 8月 25日	第1回研究会(全体会議)(於:東京女子体育大学) <ul style="list-style-type: none">・委員顔合わせ・調査研究の目的、計画、方法等審議・各班別に質問紙調査の内容審議・任務分担、事務連絡
平成23年 9月 13日	全国総合学科高等学校長協会理事長(東京都立晴海総合高等学校長) 國分達夫先生を訪ねて協力要請
平成23年 9月 22日	業務請負先((株)トリム)より調査用紙発送
平成23年 10月 21日	業務請負先((株)トリム)による調査用紙の回収
平成23年 11月 22日	業務請負先((株)トリム)より集計結果納品
平成23年 11月 26日	第2回研究会(全体会議)(於:東京女子体育大学) <ul style="list-style-type: none">・集計結果の検討・執筆分担、原稿提出日の設定
平成23年 12月 7日	第3回研究会(班代表者会議) (於:筑波大学附属坂戸高等学校) <ul style="list-style-type: none">・学校訪問調査の打ち合わせ
平成24年 1月 5日	学校訪問調査(大分県立日田三隈高等学校)
平成24年 1月 5日	学校訪問調査(兵庫県立伊丹北高等学校)
平成24年 1月 21日	第4回研究会(班代表者会議)(於:東京女子体育大学) <ul style="list-style-type: none">・報告書原稿の進行状況確認
平成24年 1月 26日	学校訪問調査(長野県塩尻志学館高等学校)
平成24年 2月 2日	学校訪問調査(愛媛県立川之石高等学校)
平成24年 2月 17日	報告書原稿を研究代表者に提出
平成24年 2月 26日	第5回研究会(全体会議)(於:東京女子体育大学)

- ・報告書原稿の確認、修正点の検討
- ・反省会、事務連絡

平成 24 年	2 月 28 日	修正した原稿を研究代表者に提出
平成 24 年	2 月 29 日	文部科学省高校教育改革係に中間成果物提出
平成 24 年	3 月 14 日	文部科学省高校教育改革係と報告書についての打ち合わせ
平成 24 年	3 月 17 日	最終原稿を研究代表者に提出
平成 24 年	3 月 19 日	報告書の印刷所発注
平成 24 年	3 月 30 日	文部科学省高校教育改革係に印刷された報告書を提出

(服部 次郎)

第2章 総合学科に在籍する生徒の意識調査

2-1 研究の目的と調査の方法

本章では、研究課題1の多様な生徒の実態把握および在籍する生徒に対する意識調査を行い、個性尊重・キャリア教育重視の理念の下に開設された総合学科に対して現在在籍する生徒はどのように感じているかを明らかにする。

調査期間は平成23年9～10月、調査対象学年は3年次生の生徒である。総合学科の学びを振り返ることができる学年として、3年次生を選定した。対象者数は1校につき3学級120名程度を標準としたが、学級規模が小さい学校など各校の様態に応じて実施した。

調査対象校は表2-1-1に示したとおりである。

調査校の選定に際しては、平成22年度全国総合学科一覧に掲載されている349校のうち国公立の学校を対象に、設置年度と地域分布の2つの条件をもとに無作為に抽出した。

まず、設置年度については、調査対象者が3年次生であることから、平成6～21年度までを対象とすることにした。年度ごとの設置校数を考慮して、初年度設置の平成6年度、平成7～12年度、平成13～18年度、平成19～21年度の4つに分けた。地域分布については、地域を6つのブロックに分けて各ブロックの設置校数の比率を算出し、北海道・東北ブロック各1校、関東ブロック各2校、北信越・東海ブロック各2校、近畿ブロック各1校、中国・四国ブロック各1校、九州・沖縄ブロック各1校とした。これらの条件を原則として調査対象校を抽出し、これに国立の2校を加えた計32校を調査対象校とした。

調査内容の主要な質問項目は、以下の計16項目を設定した。調査票は章末に示したとおりである。

- 1) 総合学科の特色をどう捉えているか。(3項目)
- 2) 個性尊重の教育を受けているか。(1項目)
- 3) 「産業社会と人間」の意義をどう捉えているか。(1項目)
- 4) 科目選択に満足しているか。(1項目)
- 5) 科目選択や進路選択におけるガイダンス機能は充実しているか。(2項目)
- 6) 将来の進路や生き方に展望を持てたか。(6項目)
- 7) 総合学科に進学したことをどう自己評価しているか。(4項目)

なお、「5) 将来の進路や生き方に展望をもてたか」については、2005年11月に全国4,000名の高校3年生を対象にした「高校生の進路についての調査(東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター、平成17～21年度文部科学省科学研究費補助金(学術創成研究費)助成)の設問項目を参考にして作成した。この研究の回答者の属性は普通科が74.5%、総合学科は3%を占めている。本調査は総合学科に在籍する生

表 2 - 1 - 1 調査対象校

ブロック	平成 6 年度 設置校	平成 7～12 年度 設置校	平成 13～18 年度 設置校	平成 19～21 年度 設置校
北海道・東北 (1校)	岩谷堂高校 (岩手)	増田高校 (秋田・H7)	木造高校 (青森・H15)	釧路明輝高校 (北海道・H19)
関東 (2校)	筑波大学附属 坂戸高校 (埼玉)	久喜北陽高校 (埼玉・H7)	みなと総合高校 (横浜・H14)	葛飾総合高校 (東京・H19)
	さくら清修高校 (栃木)※H18	川越総合高校 (埼玉・H8)	茂木高校 (栃木・H15)	猿島高校 (茨城・H21)
北信越・東海 (2校)	木本高校 (三重)	金沢北陵高校 (石川・H7)	富山いずみ高校 (富山・H14)	丸子修学館高校 (長野・H19)
	—	塩尻志学館高校 (長野・H12)	藤枝北高校 (静岡・H15)	輪島高校 (石川・H20)
近畿 (1校)	和歌山高校 (和歌山)	神戸甲北高校 (兵庫・H9)	南丹高校 (京都・H16)	千里青雲高校 (大阪・H19)
中国・四国 (1校)	益田翔陽高校 (島根)※H18	川之石高校 (愛媛・H8)	備前緑陽高校 (岡山・H15)	観音寺中央高校 (香川・H19)
九州・沖縄 (1校)	沖縄水産高校 (沖縄)	神埼清明高校 (佐賀・H8)	清峰高校 (長崎・H15)	霧島高校 (鹿児島・H20)
		愛媛大学附属 高校 (愛媛・H7) ※H20		

() 内は所在地・開設年度、※印は校名が変更された年度を示している。

徒を対象としており、総合学科の特徴をよりの確に把握するために同じ項目を設定し、先行研究の調査結果と比較、検討を行うことにした。

回答方法は、4 件法（例えば、4：そう思う、3：ややそう思う、2：あまりそう思わない、1：思わない など）により回答を得る設問を 13 項目（設問 1、設問 3～16）、複数回答を求める設問を 1 項目（設問 2）、自由記述で回答を得る設問を 2 項目（設問 17 および設問 18）とした。

調査方法については、担当者が各校に事前に調査依頼の承諾を得た上で、32 の高校に調査票の配布・回収を郵送法にて行った。

期限までに調査票が返送された 31 校を分析の対象とした。有効回答数は 3,703 である。得られたデータは統計的処理を行い、分析および考察を行った。なお、自由記述については、テキストマイニング・ツールである評価分析システム TRUSTIA を使用して分析

を行った。

また、生徒の意識と「産業社会と人間」を中心とした各校のキャリア教育の取り組みとの関連を明らかにするために、本調査において特徴的な結果がみられた高校2校を訪問し、聞き取り調査を実施した。

聞き取り調査の対象校は長野県立塩尻志学館高等学校、愛媛県立川之石高等学校である。時期は1月下旬から2月上旬にかけて、総合学科の在り方に関する聞き取りと「産業社会と人間」や「総合研究発表会」の授業参観を行った。得られたデータは調査結果の分析や考察のさいの補足データとして用いた。

(小清水 貴子)

2-2 調査結果の分析と考察

(1) 高等学校の選択について

現在、総合学科高校に在籍している生徒が高等学校を選択する際に、総合学科をどのように捉えて選択したかを明らかにするために、次の4つの設問を設けた。

設問1 高等学校を選択するとき、「総合学科の高校」がどのような学校であるか、どの程度、理解していたと思いますか。

設問2 高等学校を選択するとき、「総合学科の高校」の特徴について、あなたはどのようなイメージを持っていましたか。

設問3 高等学校を選択するとき、「総合学科の高校であること」をどの程度、意識しましたか。

設問4 総合学科の高校に入学を決めたとき、あなたの気持ちはどうでしたか。

設問1の結果が図2-2-1である。十分理解していた、やや理解していた、をあわせて、70.2%の生徒が高校選択時に総合学科を理解していたと回答している。理解の内容を探るため、総合学科のイメージを聞いたところ、最も多かった回答は「多くの選択科目が開設されている(68.5%)」であった(図2-2-2参照)。「興味関心を深められる(33.6%)」、「個に応じた指導をしてくれる(29.1%)」、「自分の生き方を考える学習ができる(23.5%)」と続く。しかし、「多くの選択科目が開設されている」が他の回答より2倍以上であることから、「科目選択ができる学校」というのが、総合学科に対する中学生の最も強いイメージであることがわかる。設問1の結果とあわせて、中学生にとって総合学科は「科目選択ができる」以外の部分についてはそれほど理解されていないことがわかる。

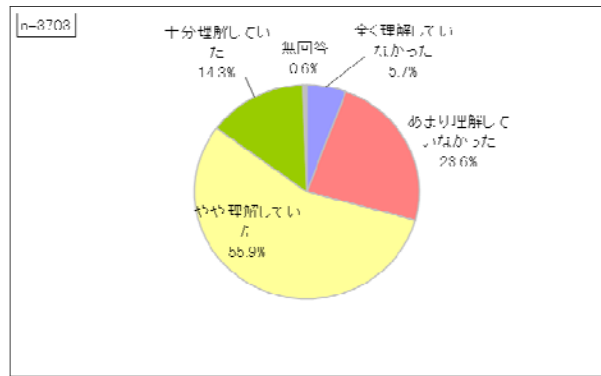


図 2-2-1 高校選択時の総合学科理解度

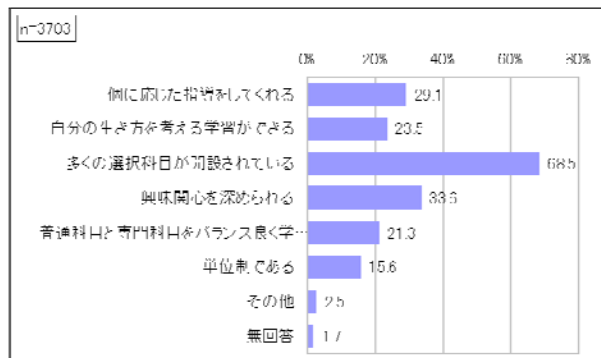


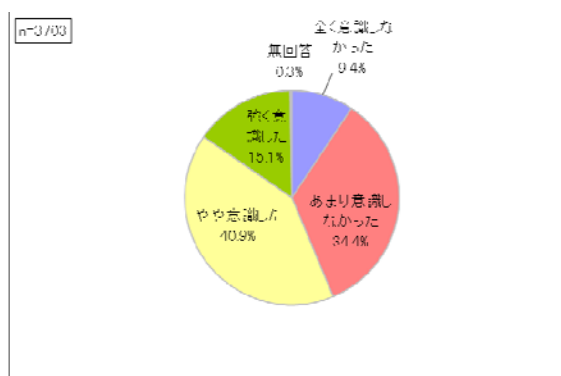
図 2-2-2 総合学科のイメージ

「その他」では、「普通科との違いがわからない」「普通科より楽」、「好きなものを選んで、嫌いなものをやらなくていい」「広く浅くって感じ」という回答も見られるが、概ね総合学科に対しては、肯定的なイメージであるといえる。

また高校選択時に総合学科を意識して選択した生徒は、「強く意識した(15.1%)」、「やや意識した(40.9%)」で、半数以上が総合学科高校を意識して高校選択を行ったことがわ

かった（図 2-2-3 参照）。

一方、総合学科に入学を決めた時の気持ちでは、「総合学科に入りたかった」と回答した生徒は 45.8% で半数に満たない（図 2-2-4 参照）。「どの学科でもよかった」（35.4%）、「普通科に入りたかった」（10.8%）、「専門学科に入りたかった」（7.0%）であった。入学ときに、総合学科に明確に前向きに入学した生徒が多いわけではないことがわかる。



高校を選択する際の意識をまとめると、以下ようになる。

- 1) 総合学科を強く希望して入学してくる生徒は半数に満たない（45.8%）。
- 2) 総合学科を意識したり、総合学科を理解して入学している生徒は 6 割から 7 割程度いる。
- 3) 高校選択時の総合学科のイメージは「多くの選択科目がある」で、「興味関心を高められる」「個に応じた指導をしてくれる」などの他の選択肢の 2 倍以上の回答がある。

図 2-2-3 総合学科への意識

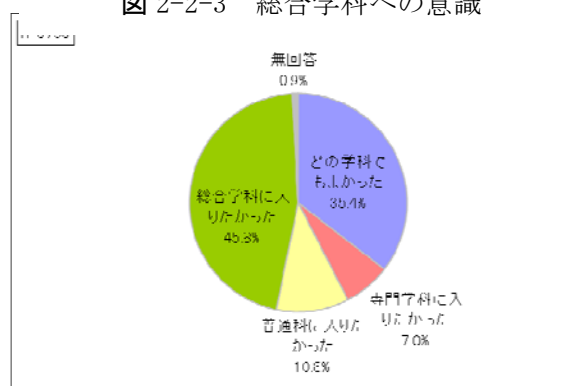


図 2-2-4 入学前の希望進路

後述する総合学科を選択したことに対する満足度調査では、8 割の生徒が総合学科を選択したことに対して肯定的な回答をしている。つまり、総合学科は生徒の期待に、一定以上応えられているといえる。また、入学時に総合学科を理解して入学した生徒は総合学科の学びに対する満足度も高いという分析結果（表 2-2-1）とあわせると、中学校や中学生に対して、総合学科に対する理解度を高めていくことが総合学科の発展のうえで非常に重要であるといえる。

表 2-2-1 入学前の理解度と学びの満足度

		総合学科の学びに対する満足度		合計
		肯定的	否定的	
入学前の理解度	理解度高い	2233 91.0%	222 9.0%	2455
	理解度低い	757 75.6%	244 24.4%	1001
合計		2990	466	3456

(2) 「産業社会と人間」における学びについて

「産業社会と人間」は、学習指導要領に「産業社会における自己の在り方生き方について考えさせ、社会に積極的に寄与し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を養うとともに、生徒の主体的な各教科・科目の選択に資する」と明記され、各学校で自己理解や

進路に関する講義，様々な体験学習，科目選択のためのガイダンス，外部講師の講演などが行われている。平成23年1月の中教審の答申では，キャリア教育のより一層の充実の必要性が指摘され，「産業社会と人間」のような科目の実施が総合学科のみならず，普通科や専門学科でも重要とされている。そこで，「産業社会と人間」の授業を，生徒自身がどのように感じ，学校が狙いとしている力をつけているかを確かめるために，次の5項目を設定した。

設問5 「産業社会と人間」について、あなたの気持ちに当てはまるものを選びなさい。

- 1) 入学時よりも自分自身を見直すことができた。
- 2) 入学時よりも、これからの生き方を考えることができた。
- 3) 入学時よりも、社会や現実や現状を新たに知ることができた。
- 4) 入学時よりも、働くことに対して意欲がわいた。
- 5) 入学時よりも、社会の出来事に対して問題意識をもつようになった。

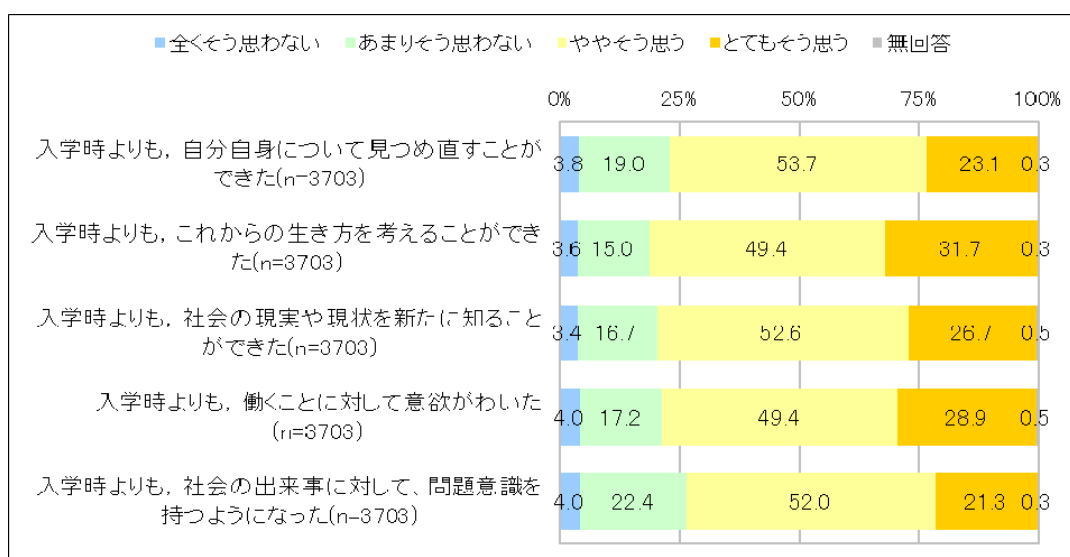


図 2-2-5 「産業社会と人間」に関する生徒の意識

図 2-2-5 に、「産業社会と人間」に関する生徒の意識を示した。各項目とも「ややそう思う」「とてもそう思う」をあわせると8割程度に達している。この結果から，生徒は「産業社会と人間」の授業に概ね前向きに取り組んでおり，学校側の意図も生徒に十分伝わっていると考えられる。働くことへの意識の低下，学校の学びと社会との乖離，自己の将来像を展望できない，大学へ入ることが目的化し大学での学び方がわからないなど，若者に関する様々な問題が指摘されている。しかし本調査結果では，「産業社会と人間」がこれらの問題に対して対応できる力があることを示唆している。

5項目のなかで，最も高い評価を得たのは「入学時よりもこれからの生き方を考えることができた(81.8%)」であり，最も低い評価を得たのは「社会の出来事に対して問題意識を持つようになった(73.3%)」である。「産業社会と人間」で自己の内面をみつめ，社会人講話や授業の中で社会のことを知り，自己の在り方や将来について考え始めることはできた。しかし，具体的に自分の視点で社会の問題をどのようにとらえ，それとどのような

形で関わっていくかまでは、もう少し時間がかかる、あるいは違うしかけが必要であるといえる。最も低い評価とはいえ、73.3%が肯定的に回答していることは十分高い値であるとも解釈できるが改善の余地はあるだろう。「産業社会と人間」できっかけをつくり、3年間を見越したカリキュラムを策定し、キャリア教育を推進していく必要がある。設問17で指摘されている「産業社会と人間」の改善点とあわせて、よりよい「産業社会と人間」の授業を創造していきたいものである。

(3) 科目選択について

総合学科において、科目選択は3年間の学びの成否を決めるといっても過言ではなく、総合学科における最も大切な活動のひとつといえる。科目選択は1年次の後半に行われる場合が多いが、まだ高校生活が1年未満の段階から将来を見越した科目選択を行うことは大変な作業であり、様々なガイダンス機能の充実が求められる。

図2-2-6は、科目を選択する時に科目選択のためのガイダンスがどの程度充実していたかを聞いたものである。「とても充実していた」「やや充実していた」をあわせると、肯定的回答が77.8%であり、非常に高い結果となった。

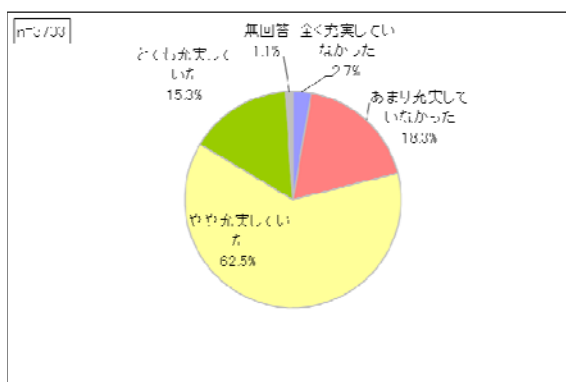


図 2-2-6 ガイダンス機能の充実度

これは、各学校で創意工夫され、よりよい科目選択ができるように勤められてきた結果といえる。

しかし一方で、設問17の自由記述に「科目選択の仕方がわかりにくい」「科目選択が急すぎる」といった科目選択の時期や方法に関する問題、「取りたい科目が抽選でとれなかった」「科目選択で思ったより取りたい科目が取れない」「将来の夢が変わったら、時間割変

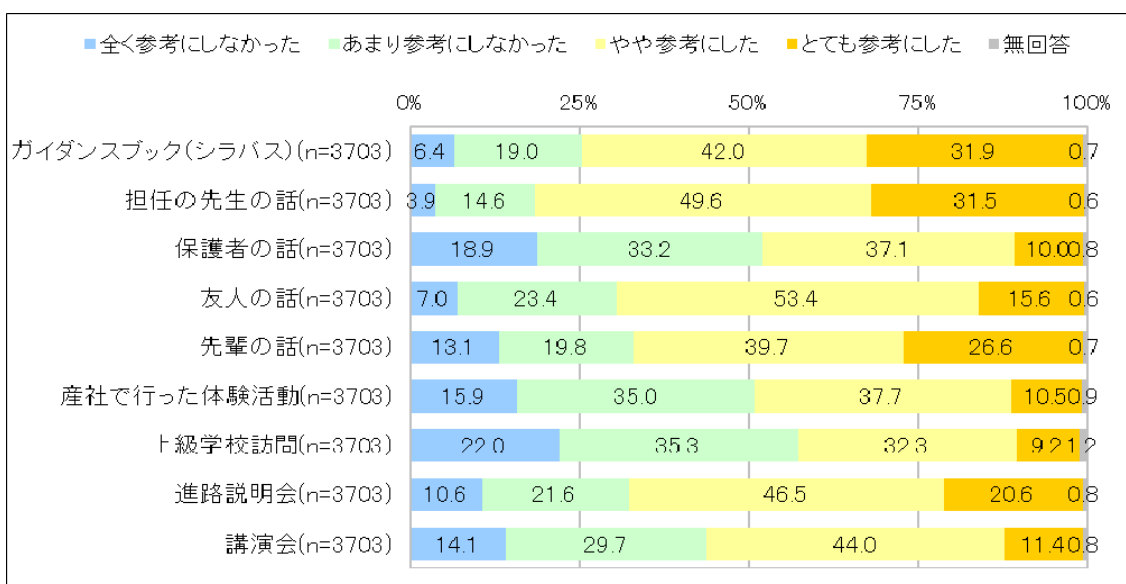


図 2-2-7 科目選択の際に参考にしたもの

更をすんなりできるようにしてほしい」といった科目選択の運用面の問題、「先生が理解していなさすぎ。学年の先生たちももっと担当の先生に聞きにいったりしたほうがいいと思う」といった教員側の問題を指摘している回答も散見される。学校の施設の問題、教員定員の問題などで全てに対応できるわけではないが、よりよい科目選択ができる工夫は常に議論し、実施できるものは実施していく必要がある。

次に、科目選択の際に参考にしたものをまとめたのが図 2-2-7 である。「とても参考にした」、「やや参考にした」をあわせて集計すると、生徒が最も参考に行っているのは「担任の先生の話 (81.1%)」で、「ガイダンスブック (73.9%)」、「友人の話 (69.0%)」「先輩の話 (66.3%)」と続く。これは科目選択という大切な作業を行ううえで、毎日接している担任の先生の話を生徒が非常に重要視している表れであり、「産業社会と人間」「面談」「ホームルーム」などで生徒と教師がしっかり信頼関係を築き向き合い、よりよい科目選択を行っていくことの重要性を表している。また、担任だけでなく開設科目の担当の先生に話を聞いたかったという回答があったことから、科目ガイダンスのなかで様々な先生の話を知る機会を作ることも大切であるといえる。「ガイダンスブック」については、ガイダンスブックがなければ、科目の内容や開設時間を知ることができず、科目選択の参考にしたものとして高い評価を得ているのは当然の結果である。本設問では、参考にしたか、しなかったかを聞いており、実際に参考になったかどうかは定かではない。「ガイダンスブックにもわかりにくいところがある」と指摘している生徒もいることから、ガイダンスブックの充実もよりよい科目選択にとって非常に重要であるといえる。実際に科目を選択して授業を受講した「先輩の話」も高い割合となった。学校によっては、2・3年生に、1年生が科目選択に関して質問できる機会を設けている学校もある。このような機会を設けることも、科目選択の満足度を高めることになるかもしれない。

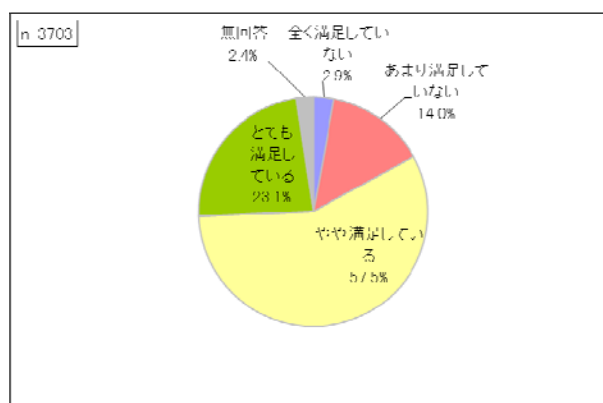


図 2-2-8 科目選択の満足度

図 2-2-8 は最終的な科目選択の満足度である。「やや満足している」「とても満足している」をあわせて、80.6%の生徒が自ら行った科目選択に満足している。これは設問 15 の「総合学科を選択したこと」について、81.2%の生徒が満足していると肯定的に回答していることとあわせて、総合学科では生徒と教師が向き合い、将来のことを考えて、充実した高校生活を送ることができていると結論づけることができる。

表 2-2-2 産社充実群と非充実群の科目選択における参考先の比較

		産社 充実群	産社 非充実群	マイナス 分
Q7.6	産社で行った体験活動(n=3703)	64	28	-36
Q7.9	講演会(n=3703)	68	38	-30
Q7.7	上級学校訪問(n=3703)	53	26	-27
Q7.8	進路説明会(n=3703)	79	53	-26
Q7.3	保護者の話(n=3703)	58	33	-25
Q7.5	先輩の話(n=3703)	76	55	-21
Q7.4	友人の話(n=3703)	78	58	-20
Q7.2	担任の先生の話(n=3703)	89	71	-18
Q7.1	ガイダンスブック(シラバス) (n=3703)	80	67	-13

しかし、総合学科も万能ではない。2-2-(2)で取り上げた設問5「産業社会と人間」に関する5項目に対して、すべて「とてもそう思う」または「ややそう思う」と回答した「産業社会と人間」に充実感を持っている群(以下、産社充実群と記す)、1つでも「全くそう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した「産業社会と人間」に必ずしも充実感を持っていない群(以下、産社非充実群と記す)を比較し、科目選択の際に参考にしたものを表2-2-1に示した。

産社非充実群の生徒は科目選択の満足度や、総合学科に対する満足度も低くなる傾向が本調査でわかっていることから、その原因を探るため、科目選択のときに何を参考にしてきたかを検討した。その結果、表2-2-1に示したように全ての項目において著しい低下がみられた。科目選択や進路選択に向けて、学校側が用意した様々な機会を十分に活かすことができず、自分のなかだけで解決しようとする傾向が強くなることがみられる。しかし、参考にしたものが「担任の先生(71%)」、「ガイダンスブック(67%)」、「友人の話(58%)」と続いていることから、日常の触れ合いや時間が非常に重要であるといえる。

産社充実群、非充実群の双方にとって、担任の先生の役割の大きさが見て取れるが、逆に、学校に対する生徒の期待や担任のかかわり方により、生徒の能力を引き出すことができる可能性も高いといえる。もちろん、担任の先生だけではなく、多くの教員が関わり、保護者や地域との連携など、様々な協働活動のなかでより良い科目選択が行われることが最も重要である。繰り返すが、科目選択の成否は生徒の3年間の学びの満足度に直結する。情報量が増え続けることと反比例して、実体験や生きることへの実感がわきにくい社会になっている。中高生にとって、自己の将来を見通すことはより難しさが増してくると考えられる。そのため科目選択のガイダンスも、時代の変化に合わせて、常に見直しを行っていかなければならないだろう。

(建元 喜寿)

(4) 将来の進路や生き方に対する展望

設問9から設問14は、2005年11月に東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターが、全国4000人の高校3年生を対象に行った「高校生の進路についての調査」(<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/cat77/cat81/post-1.html>) (以下、東大調査と記す)の設問項目を参考にして作成した。この東大調査は高校生の将来の進路展望を調査することを目的とし(さらに追跡調査も行っているが)、全国から抽出された高校生は、その大数が普通科高校の生徒である。一方で、本調査は総合学科高校の生徒を対象とした調査であるため、その違いを比較・検証することで総合学科の特性を明らかにすることが可能である。

そこで、本調査の結果を東大調査の結果と比較しながら分析および考察を行う。また、これらの項目に関して前述の2-2(3)と同様に設問5で「産業社会と人間」に関する5項目に対して、すべて「とてもそう思う」または「ややそう思う」と回答した「産業社会と人間」に充実感を持っている群(以下、産社充実群と記す)と、1つでも「全くそう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した「産業社会と人間」に必ずしも充実感を持っていない群(以下、産社非充実群と記す)にもふれながら考察していく。

まず、高校卒業後の進路決定について、以下の設問を設定した。

設問9 高校卒業後の進路を決める上で、つぎの項目をどの程度、考慮しましたか。

あてはまる番号(4. とても考慮した、3. やや考慮した、2. あまり考慮しなかった、1. 全く考慮しなかった)を1つずつ選び、○で囲んで下さい。

- 1) 学校の成績・進学先の入学試験
- 2) 家庭の経済的な状況
- 3) そのほかの家庭の事情
- 4) 近くに適当な進学先があるかどうか
- 5) 自分の志望がはっきりしているかどうか

設問10 高校卒業後の進路を考える上で、つぎの項目はどの程度、影響があったと思いますか。あてはまる番号(4. とても影響があった、3. やや影響があった、2. あまり影響はなかった、1. 全く影響はなかった)を1つずつ選び、○で囲んで下さい。

あてはまる番号(4. とても影響があった、3. やや影響があった、2. あまり影響はなかった、1. 全く影響はなかった)を1つずつ選び、○で囲んで下さい。

- 1) 家族
- 2) 友だち
- 3) 「産業社会と人間」などの授業
- 4) 学校の進路指導
- 5) 学校の先生
- 6) 塾や予備校の先生
- 7) 就職ガイドブックなど
- 8) 企業訪問・職場見学など
- 9) 学校のガイドブックなど

10) 学校主催のオープンキャンパス

設問9について、下位項目「3) そのほかの家庭の事情」で、東大調査では「とても考慮した(4.7%)」と「やや考慮した(22.7%)」を合わせた「考慮した」が27.4%であったのに対して、本調査で「とても考慮した(14.7%)」と「やや考慮した(38.3%)」を合わせた「考慮した」は53.0%と、25.6ポイントも東大調査を上回っていた(図2-2-9参照)。

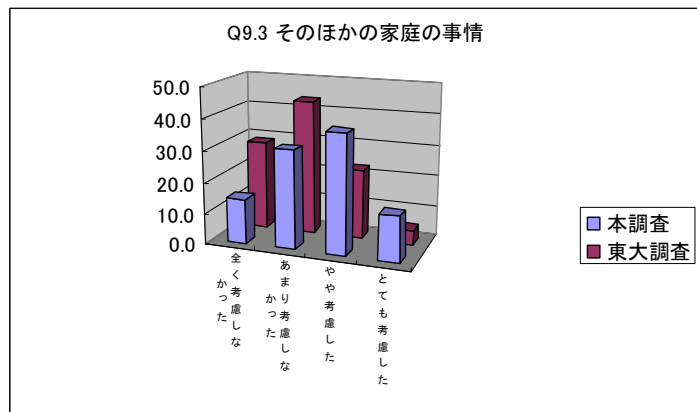


図2-2-9 そのほかの家庭の事情

しかし、その他の下位項目では本調査と東大調査との間に大きな差は見られなかった。このことから、総合学科の生徒は卒業後の進路を決めるために家庭の(経済状況以外の何らかの)事情が影響している可能性が考えられる。

この結果は、設問10の結果と関連がうかがえる。下位項目「1) 家族」について、東大調査では「大きな影響があった(24.2%)」と「影響があった(43.6%)」を合わせると67.8%だった。

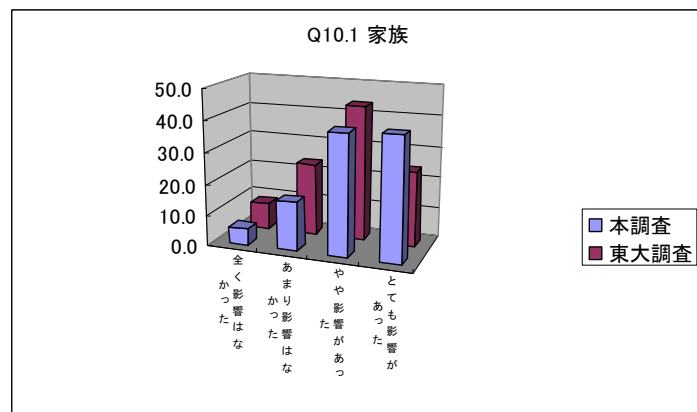


図2-2-10 家族

これに対して、本調査では「とても影響があった(39.5%)」と

「やや影響があった(38.8%)」を合わせると、78.3%が家族の影響があったと回答し、10.5ポイント上回っていた(図2-2-10参照)。このことから、進路決定に際して、総合学科の生徒は一般の高校生よりも家族の影響を受けているといえる。

しかし、総合学科の生徒が卒業後の進路を考える上で、影響を受けたのは「1) 家族」だけではない。他の下位項目「4) 学校の進路指導」と「5) 学校の先生」に注目すると、「4) 学校の進路指導」では東大調査で「大きな影響があった(10.5%)」と

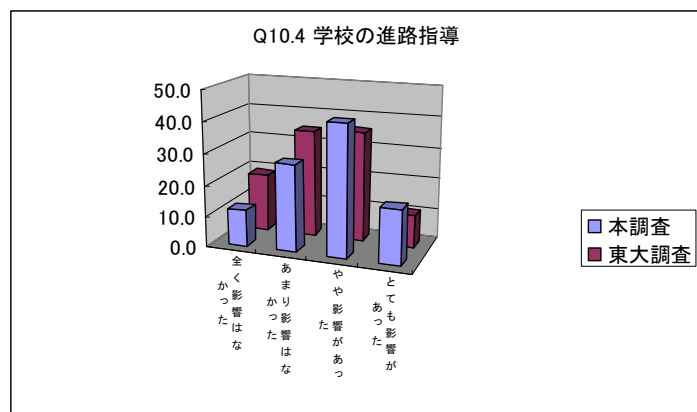
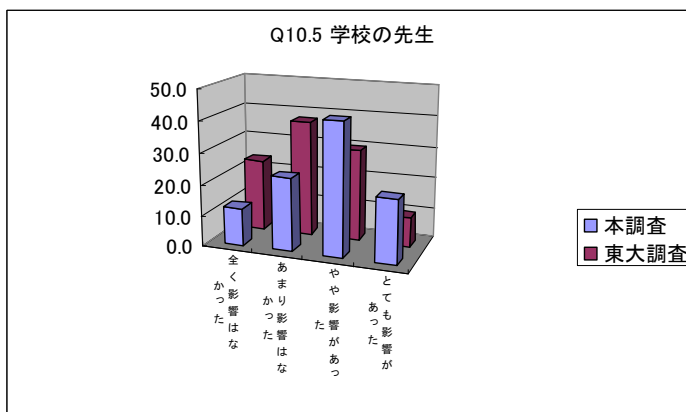


図2-2-11 学校の進路指導

5%)と「影響があった(35.8%)」を合わせた「影響があった」層が46.3%であるのに対して、本調査では「とても影響があった(17.5%)」、「やや影響があった(41.9%)」を合わせた「影響があった」層は59.4%にもなり、東大調査を13.1ポイント上回った(図2-2-11参照)。



これと関連して「5)学校の先生」でも、東大調査の「大きな影響があった(9.5%)」と「影響があった(29.7%)」を合わせた「影響があった」層が39.2%であるのに対して、本調査では「とても影響があった(20.4%)」、「やや影響があった(42.5%)」を合わせて「影響があった」層は62.9%と東大調査を大きく23.7ポイントも上回っていた(図2-2-12参照)。

図2-2-12 学校の先生

総合学科の生徒は卒業後の進路を考える上で、約6割の生徒が学校の進路指導や学校の先生の影響も受けている。これは学校に対する期待や信頼が大きいことを反映した結果であり、よりいっそうの学校における進路指導体制の充実が望まれる。

また、総合学科の生徒たちは自らの調査や体験・経験もしっかりと進路決定に関連づけていることが、「7)就職ガイドブックなど」と「8)企業訪問・職場見学など」の調査結果からうかがえる。

「7)就職ガイドブックなど」の影響力は、東大調査で「大きな影響があった(4.1%)」と「影響があった(21.1%)」を合わせた「影響があった」層が25.2%である。一方、本調査では「とても影響があった(9.3%)」と「やや影響があった(31.2%)」を合わせた「影響があった」層は40.5%で東大調査を15.3ポイントも上回っていた(図2-2-13参照)。

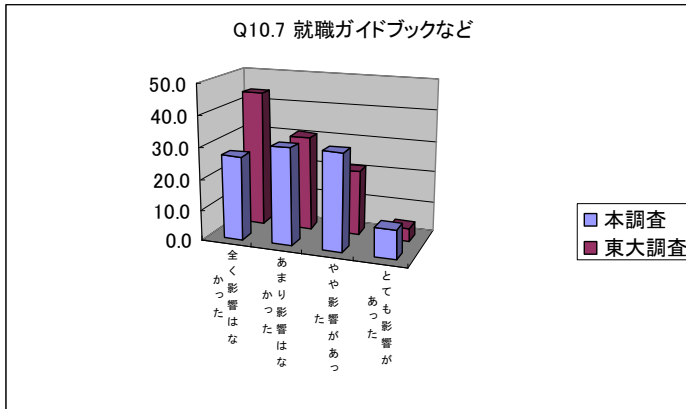


図2-2-13 就職ガイドブックなど

同様に、「8)企業訪問・職場見学など」は、東大調査の「大きな影響があった(7.4%)」と「影響があった(16.0%)」を合わせて「影響があった」層が23.4%と、4人に1人しか影響を受けていないと判断できる。これに対して、本調査では「とても影響があった(18.2%)」と「やや影響があった(30.2%)」を合わせた「影響があった」層は48.4%で東大調査を25.0%も上回っており、およそ2人に1人が影響を受けたと判断できる(図2-2-14参照)。

同様に、「8)企業訪問・職場見学など」は、東大調査の「大きな影響があった(7.4%)」と「影響があった(16.0%)」を合わせて「影響があった」層が23.4%と、4人に1人しか影響を受けていないと判断できる。これに対して、本調査では「とても影響があった(18.2%)」と「やや影響があった(30.2%)」を合わせた「影響があった」層は48.4%で東大調査を25.0%も上回っており、およそ2人に1人が影響を受けたと判断できる(図2-2-14参照)。

総合学科では積極的に就職ガイドブックを準備したり、企業訪問・職場見学の機会を設けたりしているため、普通科が調査の大数であった東大調査と比較すると予想された結果といえるのかもしれないが、それにしては総合学科の生徒にとっては進路を決める上で、これらの影響が大きいということがいえるだろう。

この差は、産社充実群と東大調査とで比較をするとさらに大きくなる（図2-2-15から図2-2-18参照）。

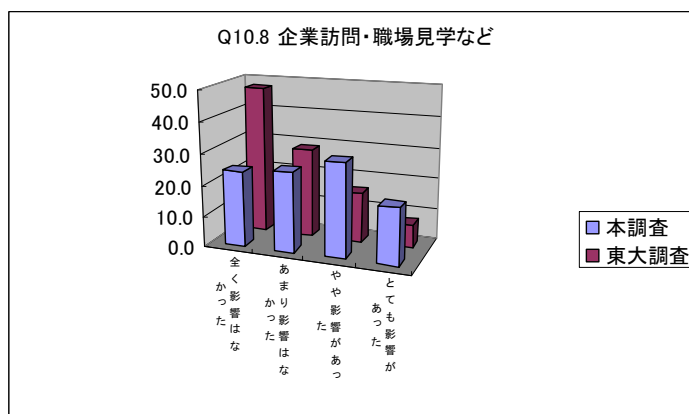


図2-2-14 企業訪問・職場見学など

Q10.4 学校の進路指導	産社充実群 (%)	東大調査 (%)
全く影響はなかった	6.0	18.8
あまり影響はなかった	23.0	34.9
やや影響があった	47.0	35.8
とても影響があった	23.0	10.5

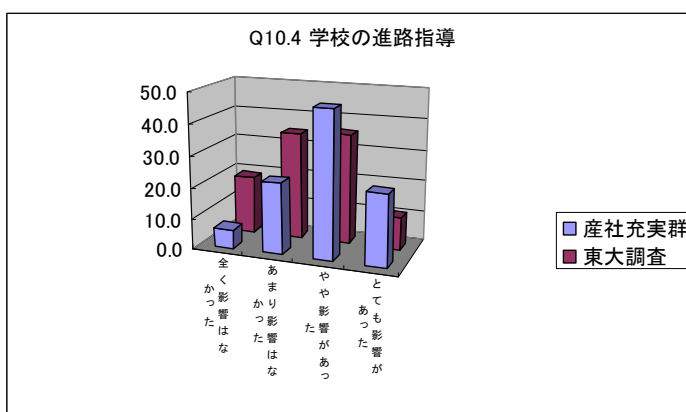


図2-2-15 学校の進路指導
(産社充実群と東大調査の比較)

Q10.5 学校の先生	産社充実群 (%)	東大調査 (%)
全く影響はなかった	8.0	23.4
あまり影響はなかった	19.0	37.4
やや影響があった	47.0	29.7
とても影響があった	26.0	9.5

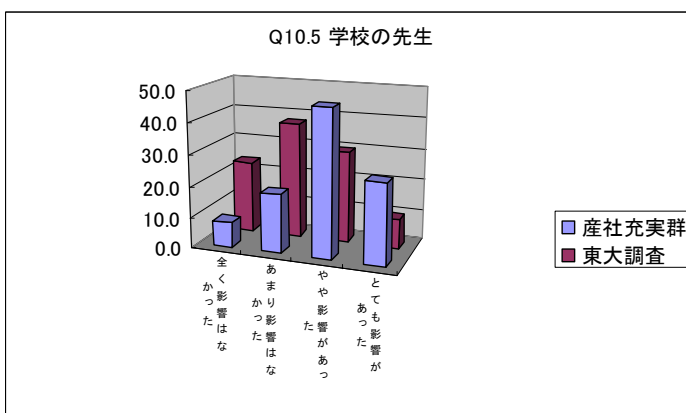


図2-2-16 学校の先生
(産社充実群と東大調査の比較)

Q10.7 就職ガイドブックなど	産社充実群 (%)	東大調査 (%)
全く影響はなかった	21.0	44.0
あまり影響はなかった	29.0	30.8
やや影響があった	37.0	21.1
とても影響があった	13.0	4.1

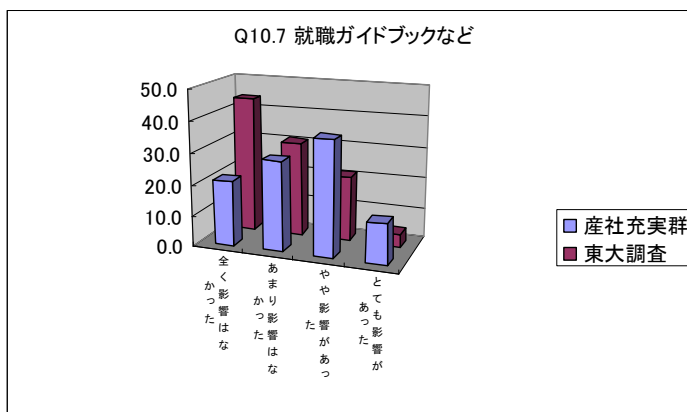


図 2-2-17 就職ガイダンスブックなど
(産社充実群と東大調査の比較)

Q10.8 企業訪問・職場見学など	産社充実群 (%)	東大調査 (%)
全く影響はなかった	18.0	47.5
あまり影響はなかった	23.0	28.8
やや影響があった	36.0	16.0
とても影響があった	24.0	7.4

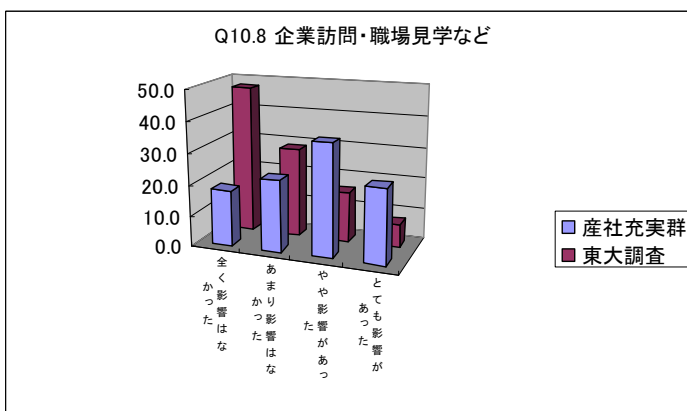


図 2-2-18 企業訪問・職場見学など
(産社充実群と東大調査の比較)

さて、ここからは進学希望者と就職希望者に分けて行った調査について考察する。まず、進学希望者のみの設問項目についてみていく。設問項目は以下のとおりである。

設問 1 1 進学する（進学したい）と考えた理由として、つぎの項目はほどの程度、あてはまりますか。あてはまる番号（4. とてもあてはまる、3. ややあてはまる、2. あまりあてはまらない、1. 全くあてはまらない）を 1 つずつ選び、○で囲んで下さい。

- 1) 進学するのは当然だと思っていたから
- 2) 高卒ではよい就職先がみつからないから
- 3) 勉強してみたい分野が見つかったから
- 4) 職業に必要な資格を取りたいから
- 5) 学生生活を楽しまたいから
- 6) まわりのみんなが進学するから

- 7) 進学すれば、自分のやりたいことがみつかると思うから
- 8) 幅広く多くの人々と知り合うことができるから
- 9) 家族や学校の先生がすすめるから
- 10) まだ就職したくないから

設問12 第一志望を決めるときに、つぎの項目はどの程度、重要でしたか。

あてはまる番号（4. とても重要である、3. やや重要である、2. あまり重要でない、1. 全く重要でない）を1つずつ選び、○で囲んで下さい。

- 1) 自宅から通える
- 2) 授業料や生活費を負担できる
- 3) 自分の成績にあっている
- 4) 自分のつきたい職業に直結している
- 5) 校風や社会からの評価
- 6) 自分の勉強したい専門分野である
- 7) 実用的な知識・技能が身につく

設問11について、本調査と東大調査の間ではあまり差が見られなかったが、産社充実群と東大調査の間では、「3) 勉強してみたい分野がみつかったから」で差が見られた。東大調査で「とてもあてはまる（41.5%）」、「あてはまる（40.4%）」を合わせた「あてはまる」と回答した層は81.9%であるのに対して、産社充実群では「とてもあてはまる（59.0%）」と「ややあてはまる（33.0%）」を合わせた「あてはまる」層は92.0%と東大調査を10.1ポイント上回っていた（図2-2-19参照）。これは「産業社会と人間」で充実した時間を過ごした生徒が、勉強したい分野をしっかりと見つけることができたといえるだろう。次に、同じく進学希望者のみの設問12について、産社充実群と東大調査を比較する。下位項目「4) 自

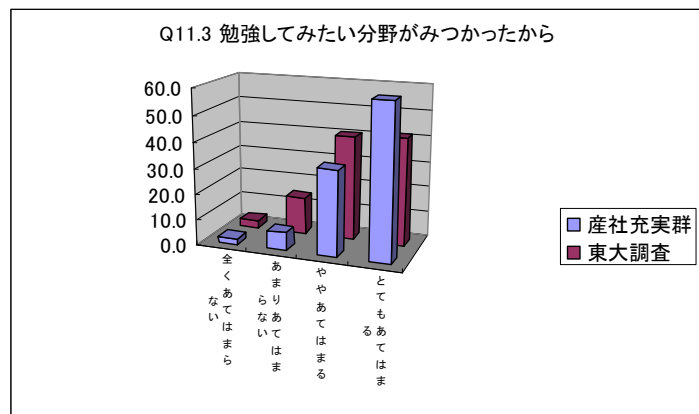


図2-2-19 勉強してみたい分野がみつかったから

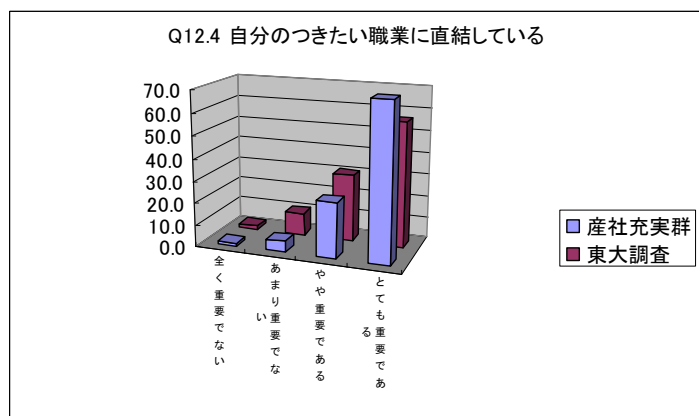


図2-2-20 自分のつきたい職業に直結している

分のつきたい職業に直結している」に注目すると、東大調査では「とても重要(56.7%)」、「やや重要(30.7%)」を合わせた「重要」と回答した層は87.4%と高い割合である。一方で、産社充実群は「とても重要である(70.0%)」と「やや重要である(25.0%)」を合わせた「重要である」とした回答が95.0%であり、さらに高い割合であった。総合学科で充実した「産業社会と人間」の時間を過ごした生徒はほぼ全員が進学で第一志望を決めるときに「自分のつきたい職業に直結している」のかどうかを重要視していることがわかった(図2-2-20参照)。

続いて、就職希望者に対して、以下の設問を設定した。

設問13 あなたが就職を考えた理由として、次の項目はどの程度、あてはまりますか。あてはまる番号(4. とてもあてはまる、3. あてはまる、2. あまりあてはまらない、1. 全くあてはまらない)を1つずつ選び、○で囲んで下さい。

- 1) 仕事をするのが自分に向いていると思うから
- 2) 早くお金をかせぎたい(経済的に自立したい)から
- 3) やりたい仕事があるから
- 4) 高卒後すぐに就職したほうがよい会社に入れると思うから
- 5) 進学しても得るものが少ないと思うから
- 6) 高卒後すぐに進学しなくても、進学チャンスはあると思うから
- 7) 家族や学校の先生にすすめられたから
- 8) 進学のための費用が高いから
- 9) 進学したい学校が近くにないから
- 10) 自分の成績ではいきたい学校に進学できそうもないから

ここでは本調査と東大調査だけでなく、産社充実群と東大調査の比較も行った。

下位項目「1) 仕事をするのが自分に向いていると思うから」では東大調査の「とてもあてはまる(15.0%)」と「あてはまる(53.0%)」から肯定的に「あてはまる」と回答したのは68.0%であった。それに対して、本調査では「とてもあてはまる(28.1%)」と「あてはまる(46.4%)」から肯定的に「あてはまる」と回答したのは74.5%であった。さらに産社充実群については「とてもあてはまる(32.0%)」と「あてはまる(49.0%)」から肯定的に「あてはまる」と回答したのは81.0%であった(図2-2-21、図2-2-22参照)。

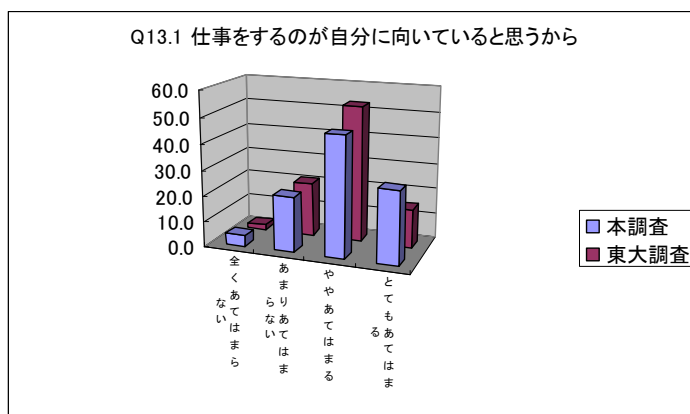


図2-2-21 仕事をするのが自分に向いていると思うから (本調査と東大調査の比較)

また、下位項目「2）早くお金をかせぎたい（経済的に自立したい）から」では、東大調査の「とてもあてはまる（34.5%）」と「あてはまる（45.2%）」を合わせて「あてはまる」と回答したのは79.7%であった。それに対して、本調査では「とてもあてはまる（48.5%）」と「あてはまる（41.2%）」から「あてはまる」と回答したのは89.7%であった。さらに産社充実群については「とてもあてはまる（53.0%）」と「あてはまる（40.0%）」を合わせた「あてはまる」という回答は93.0%にもなった。（図2-2-23、図2-2-24参照）。

さらに、下位項目「3）やりたい仕事があるから」においても、東大調査の「とてもあてはまる（14.6%）」と「あてはまる（33.7%）」を合わせた「あてはまる」という回答は58.3%であった。それに対して、本調査において、「とてもあてはまる（28.3%）」と「あてはまる（36.1%）」から「あてはまる」と回答したのは64.4%であった。さらに産社充実群では「とてもあてはまる（33.0%）」と「あてはまる（38.0%）」を合わせて「あてはまる」と回答したのは71.0%にもなった。（図2-2-25、図2-2-26参照）。

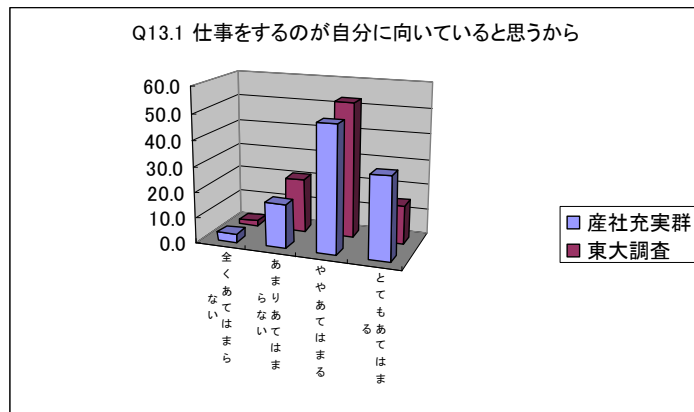


図2-2-22 仕事をするのが自分に向いていると思うから（産社充実群と東大調査の比較）

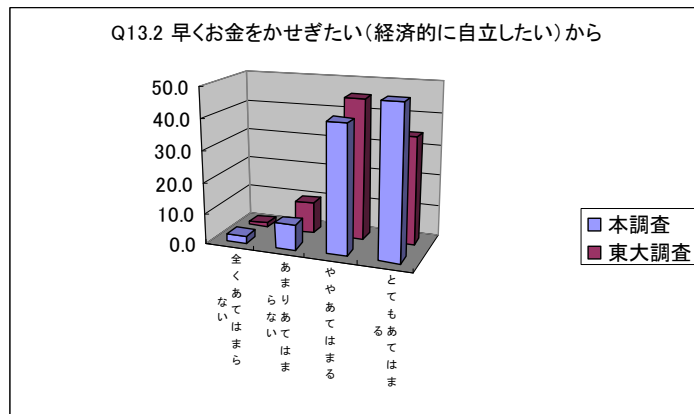


図2-2-23 早くお金をかせぎたいから（本調査と東大調査の比較）

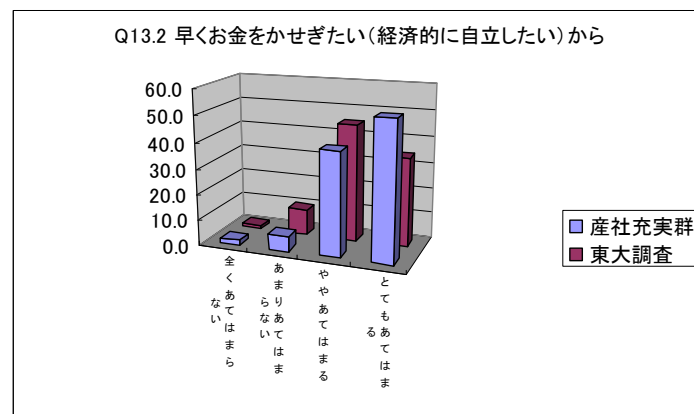


図2-2-24 早くお金をかせぎたいから（産社充実群と東大調査の比較）

これらのいずれも、東大調査より本調査、本調査より産社充実群の方が肯定的な回答が増えている。就職希望者には総合学科のカリキュラムが向いているということだろう。とくに「産業社会と人間」を有意義に過ごせた生徒であればなおさらである。

最後に、これからの社会に対する考えを聞いた。設問項目は、以下のとおりである。

設問14 これからの社会について、あなたの気持ちにあてはまる番号（4.強くそう思う、3.そう思う、2.そうは思わない、1.全く思わない）を1つずつ選び、○で囲んで下さい。

- 1) 学歴よりも資格が重視されるようになる
- 2) 年功序列ではなくなり、本人の能力を重視して昇進や昇給が行われるようになる
- 3) 仕事よりも家庭や個人の生活を大切にしている人が増える
- 4) 学歴をもっている人も安定した生活は保障されない
- 5) 会社に勤めるよりも、自分で会社を起こす人が増える

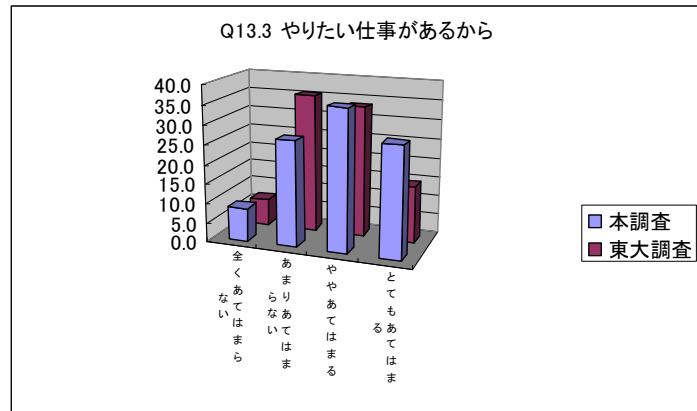


図2-2-25 やりたい仕事があるから (本調査と東大調査の比較)

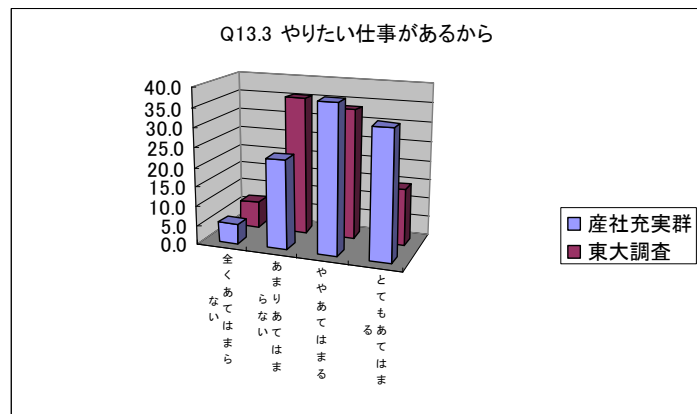


図2-2-26 やりたい仕事があるから (産社充実群と東大調査の比較)

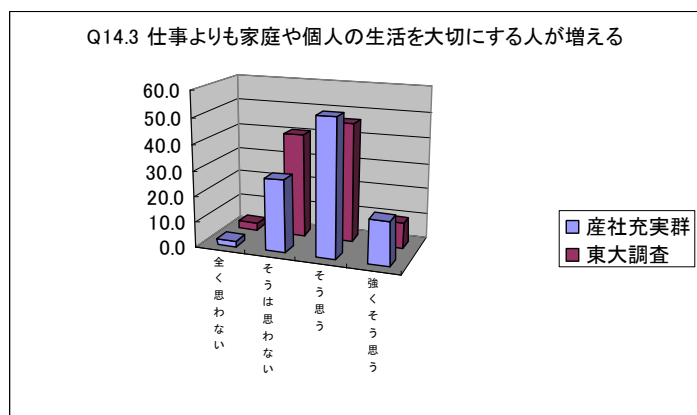


図2-2-27 仕事よりも家庭や個人の生活を大切にしている人が増える

下位項目「3) 仕事よりも家庭や個人の生活を大切にしている人が増える」では東大調査と

産社充実群との間に差が見られた。東大調査では「強くそう思う（9.8%）」と「そう思う（46.6%）」を合わせて「そう思う」と回答したのは56.4%であった。一方、産社充実群では「強くそう思う（17.0%）」と「そう思う（53.0%）」を合わせた「そう思う」という回答は70.0%と13.6ポイントも上回っていた（図2-2-27参照）。

この設問項目は、これ以外の下位項目で大きな差が見られなかった。これは、この設問項目に回答するために必要な情報が、ニュースなど学校以外の情報が大きく関係していると考えられる。これからの社会に対する意識に関しては、総合学科であるかどうかはあまり影響を与えないといえる。

（5）総合学科に進学したことに対する自己評価

総合学科に進学したことに対して、生徒自身に自己評価をしてもらった。設問項目は、以下のとおりである。

設問15 総合学科を選択したことについて、いまのあなたの気持ちにあてはまる番号（4. とても満足している、3. やや満足している、2. あまり満足していない、1. 全く満足していない）を1つ選び、○で囲んで下さい。

設問16 これまでの自分自身を振り返って、あなたの気持ちにあてはまる番号（4. とてもそう思う、3. ややそう思う、2. あまりそう思わない、1. 全くそう思わない）を1つずつ選び、○で囲んで下さい。

- 1) 産社などで、自分自身を見つめることができた
- 2) 自分の興味関心に応じた時間割をつくることができた
- 3) 普通科目や専門科目を幅広く学ぶことができた
- 4) 様々な体験活動を通じて、幅広い視野を持つことができた
- 5) 真剣に、自分の将来と向き合うことができた
- 6) 自分の好きなことを見つけることができた
- 7) 自分に自信を持つことができた
- 8) 学ぶことの楽しさを理解することができた

これらの設問項目は生徒が総合学科にどれだけ満足し、どれだけ充実した時間を過ごせたかを評価する項目である。

設問15の結果から総合学科を選択し、入学したことに対して81.2%（「とても満足している（31.4%）」、「やや満足している（49.8%）」）の生徒が「満足している」と回答している（図2-2-28参照）。この結果は、設問3で総合学科であることを意識して入学してきた生徒が56.0%（「強く意識した（15.1%）」、「やや意識した（40.9%）」）であったこと、また、設問4で総合学科に入学したかったと回答した生徒が45.8%であったことを考慮すると、3年次生での生徒の満足度がいかに高いかがわかる。この結果は総合学科に期待を持って入学してきた生徒以外の生徒たちも総合学科での

高校生活に高い満足度を示しているといえる。今後も生徒の満足度をよりいっそう上げるように努力は続けられるべきではあるが、総合学科の現状の成果を示せたといえるだろう。

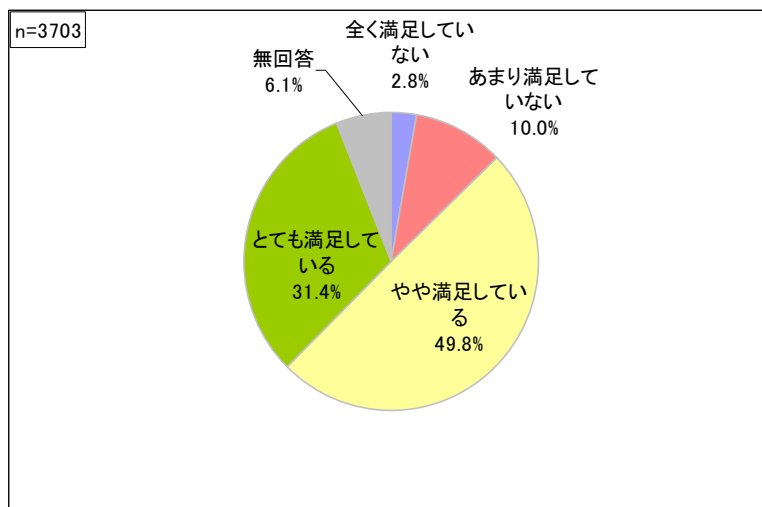


図 2-2-28 総合学科を選択したことについて

特に産社充実群と産社非充実群とで比較をしてみると、産社非充実群が「とても満足している（24.0%）」、「やや満足している（53.0%）」と肯定的な回答が77.0%であるのに対して、産社充実群の肯定的な回答は「とても満足している（41.0%）」と「やや満足している（53.0%）」を合わせて94.0%にもなり、産社非充実群の肯定的な回答の割合も決して少なくはないが、それ以上に産社充実群の肯定的な回答の割合は多い。（図2-2-29参照）。

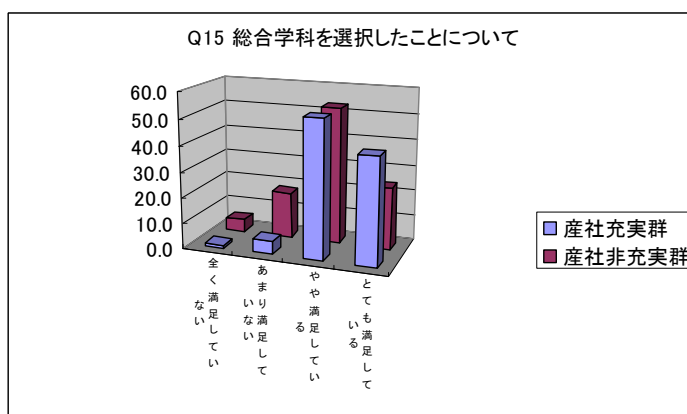


図 2-2-29

総合学科を選択したことについて

また、設問16についても産社充実群と産社非充実群とで比較をしてみると、どの下位項目についても産社充実群が肯定的な回答（「とてもそう思う」または「ややそう思う」）をしている割合が多い。なかでも、以下の下位項目では産社充実群と産社非充実群との肯定的な回答をした割合の差が大きい。まず、下位項目「6）自分の好きなことを見つけることができた」では産社非充実群の「とてもそう思う（26.0%）」、「ややそう思う（36.0%）」を合わせた62.0%の肯定的な回答に対して、産社充実群は「とてもそう思う（43.0%）」、「ややそう思う（45.0%）」を合わせると肯定的な回答は88.0%であった（図2-2-30参照）。次に、下位項目「7）自分に自信を持つことができた」

でも産社非充実群の「とても
 そう思う（7.0%）」、「やや
 そう思う（33.0%）」を合
 わせた40.0%の肯定的な
 回答に対して、産社充実群は
 「とてもそう思う（21.
 0%）」、「ややそう思う（54.
 0%）」を合わせると肯定的な
 回答は75.0%と大きく差
 が出ている（図2-2-31
 参照）。最後に、下位項目「8）学
 ぶことの楽しさを理解すること
 できた」でも産社非充実群の
 「とてもそう思う（9.0%）」、
 「ややそう思う（39.0%）」
 を合わせた48.0%の肯定
 的な回答に対して、産社充
 実群は「とてもそう思う（25.
 0%）」、「ややそう思う（57.
 0%）」を合わせると肯定的な
 回答は82.0%にもなる。
 （図2-2-32参照）。

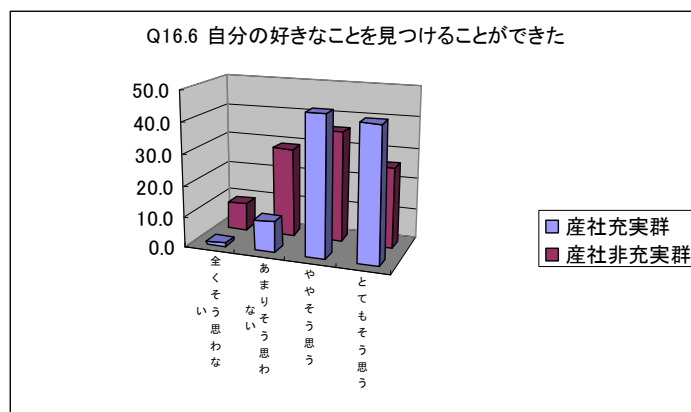


図2-2-30 自分の好きなこと
 を見つけることができた

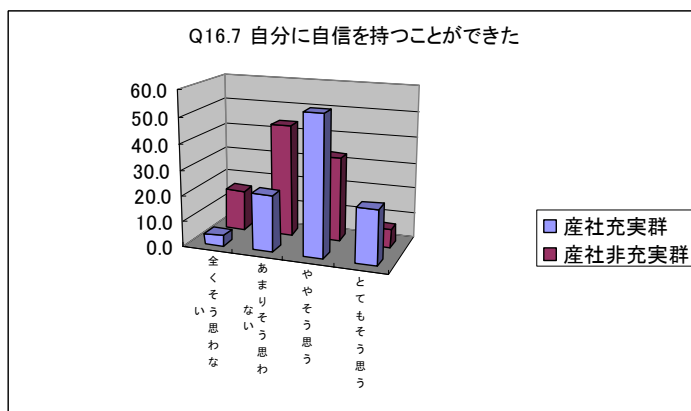


図2-2-31

自分に自信を持つことができた

設問15と設問16の分析から、総合学科での満足度や充実度の高さは「産業社会と人間」の満足度や充実度の高さとの相関関係があることがわかった。言い換えれば「産業社会と人間」の満足度や充実度が高いほど、学ぶことの楽しさを理解することができ、自分の好きなことを見つけることができる。また、自分に自信を持つことができるため、自分自身に対して肯定的に、あるいは前向きにとらえられるようになっていくことを示唆している。

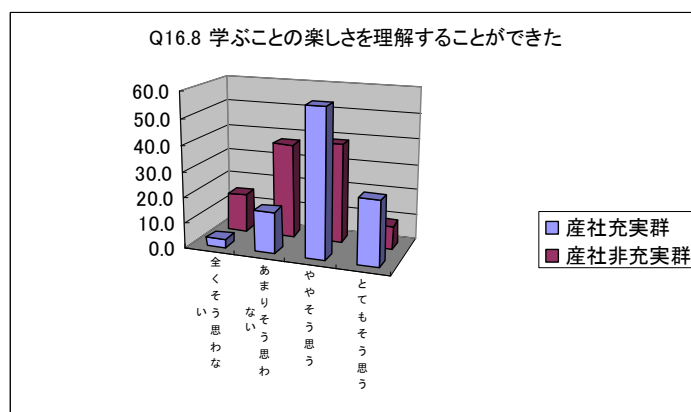


図2-2-32 学ぶことの楽しさを
 理解することができた

以上を踏まえると、総合学科は入学前の生徒の期待以上に生徒アンケートから満足度の高さが伺える。さらに、「産業社会と人間」は生徒の人間形成におい

ても、また生涯学習へのきっかけとしても十分な成果を出していることが明らかになった。
「産業社会と人間」はキャリア教育に相応しい科目であるといえるだろう。

(小澤 真尚)

(6) 高校生活に対する意識

つぎに、高校生活に対する生徒の意識を探った。設問項目は以下のとおりである。

設問 17 これまでの高校生活を振り返って、最も印象に残っていること、最も時間を費やしたこと、とても感動したこと、とくに頑張ったことはどんなことですか。いくつでも構いませんので、できるだけ多く教えて下さい。

本設問では自由記述で回答を得た。「無回答」「なし」と回答したものを除くと、回答数は2,350であり、全体の63.5%であった。

得られたデータは、テキストマイニングソフトを用いて出現語句を分類し、主題分析を行った。その結果を表2-2-3に示す。

表2-2-3 高校生活に対する意識

分類項目	出現 件数	出現 比率(%)	自由記述例
クラブ活動に関する こと	681	29.0	<ul style="list-style-type: none"> ・一番頑張ったのも、感動的だったのも、時間を費やしたのも部活で、一番一生に残っているし、一生ものだった。 ・部活動で仲間との絆が深まった。 ・部活の活動を暗くなるまで頑張れた。 ・ボランティア活動に力を入れた。 ・部活に一番時間を費やし、感動し、頑張った。 ・部活を通して、仲間の大切さに気付いた。 ・新しく始めた部活で初めて学ぶことが多かった。 ・部活動で一生懸命がんばってきた時間がすべて思い出。 ・テニス部に所属していて、顧問の先生から、テニスの技術だけでなく、自分からあいさつをするや靴はそろえて脱ぐなど社会に出たときの基本的なマナーを徹底して教えてもらったことです。
自己成長・人間関係に関する こと	531	22.6	<ul style="list-style-type: none"> ・普通科ではできないことができ、自分の将来を想像しながら、意味のある時間を過ごすことができた。 ・辛くても学校に来ること。何かにつまずいて挫折をしても頑張ったこと。 ・全体的にこの学校に入って、自分自身をみつめることができた。常に自分と向き合っていたと思う。苦しいときもあったけど、新たな発見があったりもしたし、総合学科の高校でよかったと思う。 ・ボランティア体験をたくさんすることができて、自分自身の成長につながったと思う。また、「自分の意志、気持ち」を意志表示する場が多く、「個性」を知ったり、「個性」を意識することが多かったので、視野が広がった。 ・自分の知らない世界に多く触れることができた。 ・高校生活では自分の考えをしっかりと持つ、自己確立をすることにとっても時間を費やしたし、本当に悩んだと思う。 ・一生つきあっていける親友ができたこと。自分のことをよく理解してくれる、大切に思ってくれる友達ができたこと。 ・最も印象に残っていることは個性的で良い人とたくさん出会えたこと。

学校行事、生徒会に関すること	429	18.3	<ul style="list-style-type: none"> ・文化祭もクラスマッチもどんな行事でも一生懸命できたと思う。高校3年生の一年の濃さに感動している。 ・行事イベントは最高に盛り上がる。感動した。 ・クラスマッチや文化祭に積極的に活動できた。 ・行事すべてが印象に残っています。 ・球技大会が印象に残りました。サッカーがとても楽しかったです。 ・文化祭と体育祭、スポーツ大会が印象に残っている。 ・体育祭、文化祭、球技大会は楽しかった。
修学旅行に関すること	265	11.3	<ul style="list-style-type: none"> ・修学旅行を通してクラスが仲良くなったこと。 ・修学旅行はとても楽しかった。 ・印象に残ったのは修学旅行である。オーストラリアでのホームステイはとても良い経験になった。 ・印象に残っているのは修学旅行 ・沖縄体験学習 ・修学旅行 ・研修旅行
科目選択・授業・勉強に関すること	243	10.3	<ul style="list-style-type: none"> ・頑張って朝早くに学校にきて、勉強するのを1年以上続けたこと。 ・普通科とも専門科とも違う総合学科で学び、<u>自分の学びたい事、選択授業により幅広い分野も学べた。</u>それにより自らの可能性を広げる事も出来たし、何より真剣に取り組める環境が整えられていた。それにより良い成績を残せたし、先生方の指導のおかげで進路も決定することができ、とても感謝するとともに、感動もした。 ・自分が作った時間割だから一生懸命頑張れた。 ・総合学科で自分の進む道に合わせて科目を決めるから、将来に必要な勉強を意識して頑張ったことが、自分自身変わった。 ・自分に合った時間割を作ることができ、専門的に学ぶことができた。 ・私は勉強がしたくないという理由で、総合学科に来ました。自分の関心に応じて様々なことを学べたので満足です。 ・高校生活を通して考えてみると、<u>実習が多かったかな</u>と思います。机に座って学習しているだけではわからないことも多くあるので、実習をたくさんできてよかったです。 ・総合学科は普通の学校より、たくさんの分野の勉強ができるし、たくさんの先生と知り合えて<u>知識の幅も広げることができた</u>し、この学校で良かったと思った。 ・<u>職場見学</u>で実際に自分の将来の夢と関係のある所に行って体験できたり、色々な大学に行くことができて良い経験になった。<u>卒業研究</u>を通して自分の将来の夢についてたくさん調べることができた。 ・<u>卒業研究</u>を通して進路が大幅に変わった！！卒業研究をしなければ今の進路にたどりつけなかったと思うので頑張ってよかった。 ・2年生からの自分の好きな<u>授業</u>がたくさん取れるようになって、一気に成績が上がったこと。 ・工業の<u>授業</u>でもものをつくるという難しさ、楽しさ、やりがいを感じました。 ・私は高校生活で<u>勉強</u>が一番頑張ったと思います。一時期は集中できず、行き詰まった時期もありましたが、それでも努力を怠ることなく取り組めたと思います。 ・高大連携の<u>課題研究</u>を通して、「学び」の総合的な必要性を発見することができた。 ・<u>卒研</u>が楽しかったこと。さらに深く研究したいと思うようになった。

			<p>った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合学科ならではの卒研や産業社会の授業で、今までに書いたことがない字数を書いたこと。数をこなすことを学んだ。 ・私が最も時間を費やしたのは勉強です。テストとか、予習とかの家庭学習をたくさんした。
検定・資格に関する こと	138	5.9	<ul style="list-style-type: none"> ・検定取得のために学校に残って、勉強を頑張った。 ・難しい検定に挑戦して合格できたこと。様々な経験をすることができてよかった。 ・一番時間を費やしたのは資格取得です。 ・商業系の授業で資格取得を頑張った。普通科ではできないことができた。 ・とくに頑張ったのは資格取得に向けての勉強です。いままでにないくらい勉強して、みんなで合格したときは本当に嬉しかったです。 ・専門科目で将来の夢につながる資格を取ることができた。
進路・就職に関する こと	63	2.7	<ul style="list-style-type: none"> ・最も時間を費やしたことは自分の進路について考えたこと。 ・高校卒業後の進路についてはとても役に立つことを教えていただきました。 ・自分の進路に必要なことを学ぶことができた。 ・自分の将来設計について考えることができた。 ・自分が就職する企業を選ぶのに時間をかけた。 ・曖昧だった自分の進路だったけど、自分が一番やりたくて、自分に一番あっていて、自分がこれだと思えることを選ぶことができました。今では総合学科に入学したおかげで、自分の将来に向き合い、自信をつけることができました。
計	2,350	100.0	

※出現比率は小数点第2位を四捨五入。記述例の下線部は筆者による

カテゴリーに分けると、「クラブ活動に関すること681（29.0%）」「自己成長・人間関係に関すること531（22.6%）」「学校行事、生徒会に関すること429（18.3%）」「修学旅行に関すること265（11.3%）」「科目選択・授業・勉強に関すること243（10.3%）」「検定・資格に関すること138（5.9%）」「進路・就職に関すること63（2.7%）」の順に、記述が多かった。

つぎに、各項目の詳細についてみていく。

高校生活で印象に残っていることについて、もっとも多かった記述は「クラブ活動に関すること681（29.0%）」であった。記述内容から、クラブ活動に多くの時間を費やしたこと、活動を通して仲間との絆について考えたこと、技術だけでなく生き方について学んでいることなどが明らかになった。

二番目に多かった「自己成長・人間関係に関すること531（22.6%）」では、「普通科ではできないことができ、自分の将来を想像しながら、意味のある時間を過ごすことができた。」のように、充実した高校生活を送れたことや、「・・・つまり挫折をしても頑張ったこと。」「・・・常に自分と向き合っていたと思う。苦しいときもあったけど、新たな発見があったりもしたし、総合学科の高校でよかったと思う。」「・・・自分自身の成長につながったと思う。」など、自分を振り返ったり、生徒自身が自己の成長を感じていることが明らかになった。

また、「ボランティア体験をたくさんすることができて、自分自身の成長につながったと思う。また、「自分の意志、気持ち」を意志表示する場が多く、「個性」を知ったり、「個性」を意識することが多かったので、視野が広がった。」の記述にみられるように、総合学科の特徴である個性尊重の教育に対して、生徒が肯定的に受け止め、自己成長を果たしていることが推察された。

「学校行事、生徒会に関すること429（18.3%）」では、文化祭や体育祭、クラスマッチやスポーツ大会、合唱コンクールなどのキーワードが、また「修学旅行に関すること265（11.3%）」では、修学旅行、研修旅行などのキーワードが目立った。

「科目選択・授業・勉強に関すること243（10.3%）」では、キーワードだけでなく、具体的な内容の記述がみられたことが特徴としてあげられる。

生徒の記述をみると、「私は勉強がしたくないという理由で、総合学科に来ました。自分の関心に応じて様々なことを学べたので満足です。」のように、入学時には消極的な理由で総合学科を選択した生徒も、3年間の学習を通じて満足感を得ていた。また、「普通科とも専門科とも違う総合学科で学び、自分の学びたい事、選択授業により幅広い分野も学べた。それにより自らの可能性を広げる事も出来たし、何より真剣に取り組める環境が整えられていた。それにより良い成績を残せたし、先生方の指導のおかげで進路も決定することができ、とても感謝するとともに、感動もした。」「総合学科で自分の進む道に合わせて科目を決めるから、将来に必要な勉強を意識して頑張ったことが、自分自身変わった。」「総合学科は普通の学校より、たくさんの分野の勉強ができるし、たくさんの先生と知り合えて知識の幅も広げることができたし、この学校で良かったと思った。」など、科目選択により自分の可能性を広げ、主体的に学習に臨んだ姿が見受けられた。

「高校生活を通して考えてみると、実習が多かったかなと思います。机に座って学習しているだけではわからないことも多くあるので、実習をたくさんできてよかったです。」「職場見学で実際に自分の将来の夢と関係のある所に行って体験できたり、色々な大学に行くことができて良い経験になった。卒業研究を通して自分の将来の夢についてたくさん調べることができた。」など、実践的、体験的な授業により、学習意欲を高めたり、将来の進路に対する意識づけができた様子がみられた。

1993年2月に発表された「高等学校教育の改革の推進について（第四次報告）」において、総合学科の教育の特色としてあげられている「2 生徒の個性を生かした主体的な学習を通して、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を可能にすること。」に関して、生徒たちは自分の個性を生かして主体的な科目選択を行い、実習や体験学習を通して学ぶ楽しさを見い出しているといえる。

「検定・資格に関すること138（5.9%）」では、「一番時間を費やしたのは資格取得です。」「難しい検定に挑戦して合格できたこと。様々な経験をすることができてよかった。」など、検定試験や資格取得に向けた学習に力を注いだ様子がみられた。また、「商業系の授業で資格取得を頑張った。普通科ではできないことができた。」「専門科目で将来の夢につながる資格を取ることができた。」など、総合学科の学習に対して満足感を感じていることがわかった。

「進路・就職に関すること63（2.7%）」では、「最も時間を費やしたことは自分の進路について考えたこと。」「高校卒業後の進路についてはとても役に立つことを教えてい

いただきました。」「自分の進路に必要なことを学ぶことができた。」など、進路について考えたり、学んだ様子がみられた。

また、「曖昧だった自分の進路だったけど、自分が一番やりたくて、自分に一番あっていて、自分がこれだと思うことを選ぶことができました。今では総合学科に入学したおかげで、自分の将来に向き合い、自信をつけることができました。」のように、第四次報告における総合学科の特色である「1 将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること。」が有効に機能していることが推察される。科目選択や「産業社会と人間」などの授業において、自己の在り方生き方をより深く考える契機を生徒に与え、進路に対する自覚を高めることが今後も期待される。

以上、高校生活で印象に残っていることについて、総合学科の特色である「職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習」や「生徒の個性を生かした主体的な学習を通して、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習」に関する記述がみられ、総合学科に在籍したことを前向きにとらえていることがわかった。また、普通学科や専門学科とは異なる総合学科ならではの学習方法や進路指導に対して、満足感を得ていることがわかった。

(7) 総合学科の改善点に対する意識

つぎに、総合学科の改善点に対する生徒の意識をみってみる。設問項目は以下のとおりである。

設問 18 総合学科高校の特徴的なしくみ（「産業社会と人間」の授業や科目選択、系列など）について、改善した方がよいと思うことを書いてください。

この設問項目に対して、自由記述で回答を得た。「無回答」「なし」「改善点はとくにない」と回答したものを除いた回答数は1,264であり、全体の34.1%であった。

得られたデータは、テキストマイニングソフトを用いて出現語句を分類し、主題分析を行った。その結果を表2-2-4に示す。

表2-2-4 改善を希望すること

分類	出現 件数	出現 比率(%)	自由記述例
授業内容に関すること	573	45.3	<ul style="list-style-type: none"> ・最初に授業の予定表を配ってほしい。 ・もっと実践的で、周りとの対話ができる授業が必要だと思う。 ・受け身の授業ばかりではなく、ディベートなどの積極的な授業を増すべき。 ・講演会について、成功者だけの話を聞いても長くて疲れるし、何より頭に残らない。中身のつまった、本当にためになる話が聞きたかった。 ・もっと多くの授業について体験し、考える機会。 ・もっと自分を見つける授業がほしい。

			<ul style="list-style-type: none"> ・自分のよいところを伸ばすことができる授業。 ・講演もよいが、授業も重視すべき。 ・授業時間を増やすことができないのかと考えた。 ・普通科よりも授業時数が少ないのはわかるが、1年間で教科書が終わらないのは問題である。それで模試の点が低いと言われても…。 ・最低、センター試験が受けられるぐらいの基礎学力を身に付けさせる授業を展開していくべき。 ・もう少し基礎レベルの学びがあると助かる。 ・自分の興味関心のある分野を選択できるのはとても良いと思うが、基礎的なことを学ぶのを重要視し、将来に結びつけていくべきだと思う。 ・総合学科に入学しても3年間のうちで本気で上級学校に進学したいと思う人がいる（私がそうでした）。だから、総合学科出身でも大学受験に不利のないような授業をしてほしい。 ・卒業研究は2年生の中間あたりから始めた方がよい。 ・3年生での卒業研究は進路もあるので大変です。 ・課題研究はもっと早い段階です。 ・教員の絶対数が足りない。同じく、施設が足りない。 ・先生一人一人の授業の教え方。わからない先生とわかる先生の差が大きい。 ・先生方の熱意が足りない。選択する授業の内容がうすい。 ・もっと生徒が興味をもてるような授業。 ・ガイダンスブックの授業説明と、実際の授業内容が少し異なることがあったので改善した方がよいと思います。 ・移動教室が多いので休み時間が少なくなり、時間が足りないと思うときがある。
科目選択に関すること	458	36.2	<ul style="list-style-type: none"> ・系列を決める際に、上級生と話せる機会が欲しかった。現役でその授業を受けている人の話を聞きたかったから。 ・科目選択が急すぎる。 ・科目選択がややこしい。 ・科目選択の仕方がわかりにくい。 ・ガイダンスをしてもわかりにくいことがあるので、もっと詳しく教えるべき。 ・わかりにくいので、説明を簡単にしてほしい。 ・総合学科を売りにして授業選択が自由と行っているわりには、それぞれの授業についての説明が全くもって不十分。 ・もっと科目を増やしてほしい。(多数) ・自分自身で授業を選び、自分に合った勉強ができる。 ・科目選択で、思ったより取りたい授業が取れない。もっといろいろなことをしたかった。 ・もっと自由選択で、他分野の授業をとれるようにしてほしい。 ・もっと幅広く授業の分野を増やした方がよいと思う。総合学科の良さがあるのに、進学率を増やそうとするのはまちがっていると思う。 ・それぞれの科目の先生を増やして、もっと取りたい科目をとらせるべきだと思う。 ・人数が足りないという理由で、選択を却下された。総合学科なので、受講したい授業を選択できるということだったのに、このようなことはあってはいけないと思う。 ・総合学科でも自分が受けたい授業の人数が少なく、開講されなかった。 ・自分が選択したい科目を選択したのに、なぜか抽選という形になって、結局、自分がとりたかった科目をとれず、別にとりたくなかった科目を取ることであり、総合学科の意味がないので

			<p>はと思った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来の夢が変わったら、時間割変更をすんなりできるようにしてほしい。 ・先生が理解してなさ過ぎ。学年の先生たちも、もっと担当の先生に聞いたりした方がいいと思う。 ・先生の意見が違い過ぎる。
系列に関する こと	151	11.9	<ul style="list-style-type: none"> ・系列にとらわれずに、自分の興味のある授業を選択できるようにしてほしい。 ・もう少し系列を増やしてもよいと思う。もっと自由に選べるとういなど思った。 ・系列ごとの区分分けはいらないと思う。 ・系列は多いが、それぞれの系列であまり差がない。もっと系列ごとで専門的なことを学ぶべき。 ・もう少し専門分野の数を多くし、種類も増やすべきだ。そうすることによって、もっと生徒が将来の職業について深く考えるようになるだろう。 ・バランスよく学ぶことができるが、専門分野をもっと深く学習できるようにしたらよい。 ・専門分野に関して、とても興味・関心などがあつた場合に、一歩踏み込んで理解をする機会がないこと。 ・コースによって難易度が違い過ぎる。 ・一度、系列を決めたら変えられないところ。総合とはいふものの、結局は専門が4つあるだけなところ。 ・シラバスにもう少し詳しくどのように専門的なことを学ぶのかを書いた方がよい。 ・系列によって人数が違ったりして、人数が多い系列だと、あまり先生に相談できないので改善してほしい。
「産業社会 と人間」に 関すること	55	4.4	<ul style="list-style-type: none"> ・産社をやる意味があるのかわからない。 ・産社の授業はいらない。 ・産社はただテキストを埋める作業が多く、特に印象に残ったり、参考になることはなかった。 ・産社はほとんど講演だけで印象に残っていない。もっと体験的なこともあつたらよかった。 ・産社はあまり充実していなかった。もっと質を向上してほしい。 ・産社は、適当にいやいや行う人が多いので、興味をもつ工夫をすればよいと思う。 ・産社のメリットをもっと明確にした方がよい。 ・いま思うと産社はためになったと思うけど、やっている時はよくわからなかった。だから、目的とかをもっと明確にした方がいいと思う。 ・産社の授業をもっと増やして、将来についてもう少し考える時間が欲しい。(就職だけではなくて、大学や専門について詳しく知りたい) ・産社の授業は3年間あつた方がよいと思う。
進路に関する こと	27	2.1	<ul style="list-style-type: none"> ・商業科目でとれる資格を増やすべきだと思う。 ・取りたい資格を取らせてほしい。 ・途中で進路を変えたときの対応。 ・新たな夢が見つかったときに進路を変えられない。 ・途中で進路変更をした場合、受験に必要な科目をとれない場合がある。 ・自分の進路に必要なこと+αが学べる ・入学して間もなく科目を決定するのは、進路変更をしたいときに不便だ。 ・もっと真剣に進路について考えさせるべきだ。 ・もっと個々の進路の動きに合わせてほしい。

計	1,264	100.0
---	-------	-------

※出現比率は小数点第2位を四捨五入。

カテゴリーに分けると、「授業内容に関すること 573 (45.3%)」「科目選択に関すること 458 (36.2%)」「系列に関すること 151 (11.9%)」「産業社会と人間に関すること 55 (4.4%)」「進路に関すること 27 (2.1%)」の順に、記述が多くみられた。

生徒が改善点を要すると考えている項目は、「授業内容に関すること 573 (45.3%)」がもっとも多かった。「もっと実践的で、周りとの対話ができる授業が必要だと思う。」「もっと多くの授業について体験し、考える機会」など学習方法に関する記述、「もっと自分を見つける授業がほしい。」「自分のよいところを伸ばすことができる授業。」など個性尊重に向けた授業に関する記述、「講演もよいが、授業も重視すべき」「最低、センター試験が受けられるぐらいの基礎学力を身に付けさせる授業を展開していくべき。」「もう少し基礎レベルの学びがあると助かる」「自分の興味関心のある分野を選択できるのはとても良いと思うが、基礎的なことを学ぶのを重要視し、将来に結びつけていくべきだと思う。」など、基礎学力の向上に関する記述、「卒業研究は 2 年生の中間あたりから始めた方がよい。」「課題研究はもっと早い段階です。」などカリキュラムに関する記述などがみられた。

つぎに多かった項目は、「科目選択に関すること 458 (36.2%)」であった。「系列を決める際に、上級生と話せる機会が欲しかった。現役でその授業を受けている人の話を聞いたかったから。」「総合学科を売りにして授業選択が自由と行っているわりには、それぞれの授業についての説明が全くもって不十分。」など、科目選択のガイダンスのあり方に関する記述や、「もっと科目を増やしてほしい。」「もっと幅広く授業の分野を増やした方がよいと思う。総合学科の良さがあるのに、進学率を増やそうとするのはまちがっていると思う。」「総合学科でも自分が受けたい授業の人数が少なく、開講されなかった。」「自分が選択したい科目を選択したのに、なぜか抽選という形になって、結局、自分がとりたかった科目をとれず、別にとりたくなかった科目を取ることになり、総合学科の意味がないのではと思った。」など、選択科目の充実や選択を希望する科目を受講できるシステムに対する要望がみられた。また、教師に対して、「先生が理解していなさ過ぎ。学年の先生たちも、もっと担当の先生に聞いたりした方がよいと思う。」など、教員の指導が十分にできていないことに対する指摘もみられた。「生徒の個性を生かした主体的な選択が可能となる教育課程」の実現に向けて、選択科目を充実させるとともに、適切な科目選択の指導が必要であるといえる。

「系列に関すること 151 (11.9%)」では、「もう少し系列を増やしてもよいと思う。もっと自由に選択できるといいなと思った。」など、科目選択と同様に系列について選択の幅を増やしてほしいという意見が多かった。また、「もっと系列ごとで専門的なことを学ぶべき。」「バランスよく学ぶことができるが、専門分野をもっと深く学習できるようにしたらよい。」など、系列の特色を強調することを望む意見や、「もう少し専門分野の数を多くし、種類も増やすべきだ。そうすることによって、もっと生徒が将来の職業について深く考えるようになるだろう。」「専門分野に関して、とても興味・関心などがあった場合に、

一歩踏み込んで理解をする機会がないこと。」「系列によって人数が違ったりして、人数が多い系列だと、あまり先生に相談できないので改善してほしい。」など、進路選択や個に応じた教育に対する対応策を求める意見がみられた。

つぎに、「産業社会と人間」に関すること55（4.4%）では、授業について賛否両論がみられた。否定的な意見では、「産社をやる意味があるのかわからない。」「産社はただテキストを埋める作業が多く、特に印象に残ったり、参考になることはなかった。」「産社はあまり充実していなかった。もっと質を向上してほしい。」などであった。反対に、賛成意見では、「いま思うと産社はためになったと思うけど、やっている時はよくわからなかった。だから、目的とかをもっと明確にした方がいいと思う。」「産社の授業をもっと増やして、将来についてもう少し考える時間が欲しい。（就職だけではなくて、大学や専門について詳しく知りたい）」「産社の授業は3年間あった方がよいと思う。」などであった。授業の目的を理解している生徒にとっては有意義な授業であるが、目的が理解できない生徒にとっては無意味な授業として受け取られていることが明らかになった。授業を行う意義を生徒が感じられる学習内容の工夫とともに、なぜ「産業社会と人間」を学ぶのか、学習目的を明確にする必要があるといえる。

最後に、「進路に関すること27（2.1%）」では、「取りたい資格を取らせてほしい。」など資格取得の充実、「途中で進路を変えたときの対応。」「新たな夢が見つかったときに進路を変えられない。」など進路変更への対応、「もっと真剣に進路について考えさせるべきだ。」「もっと個々の進路の動きに合わせてほしい。」など進路指導の充実を望む意見がみられた。総合学科の特色は、将来の進路について明確な展望を持たずにいる生徒を受け入れ、「高等学校での様々な学習や活動を通して自己の能力や適性を発見していく教育」を行うところにある。進路指導を充実させることと、生徒の進路変更に対応できる対策を練ることが求められる。

以上の結果から、生徒たちは、体験的な学習方法、個性尊重の教育、キャリア教育に向けた科目選択や進路指導の充実など、総合学科の特色をより明確にするための改善点をあげていた。これは、普通科にはない総合学科ならではの教育を、生徒たちが求めていることの表れであるといえる。総合学科を選択し、入学してきた生徒たちが、卒業時に総合学科での学びに充実感や満足感を得、自信をもって人生の一步を踏み出せるように、指導を工夫・充実させることが求められる。

（小清水 貴子）